慈濟

ものがたり

ツーチー　2021年5月　293

●扉の言葉　文・證厳法師　訳・済運　撮影・蕭耀華

この世に幸福をもたらす

一瞬の無明によって、善悪は拮抗し、
惑いから悪業を作り、生態系に災いをもたらしてしまいます。
無縁の人に大慈をかけるとは ——
正道を歩み、大きな智慧でもって、親しみを込めて人に接すること。
相手の身になって悲しむとは ——
虚空を包み込むほどの広い心で衆生を護り、愛でもって繋がりを持つこと。
平穏に暮らし、互いに感謝し合い、
愛の心を持って、この世に幸福をもたらすべきです。

慈済日本サイト

目次

【編集者の言葉】
豊かな善の循環　善耕／訳　4

【主題報道】
レンタルも販売もしないエコ福祉用具プラットフォーム
障害者を支える歳月　御山凛／訳　8
運送・設置・指導
慈善の精神でトータルケア　有田夏子／訳　21

【特別報道】台鉄太魯閣号事故
希望の光で真っ暗なトンネルを照らすよう祈る　済運／訳　34
慈済ケア日記　田中亞依／訳　56
その車両に入ると　黒川章子／訳　66

【證厳法師のお諭し】
人類共通の目覚め　慈願／訳　74

【行脚の軌跡】
善行を習慣づける　済運／訳　80

【百の流れは海へと帰る】
穏やかに人生を終える権利　明澔／訳　86

【国際慈善】
反復して無常を呈するコロナ禍
今まで通り善行する慈済　本諦／訳　90
2020年歳末　貧困救済の配付活動　高雪白／訳　95
冬を越す大阪の「街友（まちとも）」たちを支援する
自粛規制は守っても、
愛が遅れてはならない　明澔／訳　98
四月の出来事　済運／訳　107

表紙

2017年に立ち上げられた「慈済エコ福祉用具プラットフォーム」は、消毒と修理をした後に、それらを必要としている家庭に届けている。そのようなリサイクル福祉用具の数は、これまでで1万1千点を超えた。桃園市の八徳区静思堂地下1階にあるこのサイトの倉庫には、修繕されて新しくなった福祉用具が分類別に棚に保管され、それらを必要とする人に贈呈されるのを待っている。

編集者の言葉

豊かな善の循環

◎訳・善耕

一月中旬、桃園国際空港の近くにある衛生福利部（厚生労働省に相当）立桃園病院で、新型コロナウイルスのクラスターが発生した。市中に緊張が走ったが、幸いにも二月上旬には警戒体制が解かれた。緊急対策実施期間中、多くの人が医療スタッフを応援し、持ち場を守る勇者たちを支持したことで、彼らが孤独を感じることなく、最前線を守るためのより大きな力を得ることができた。

これは貴い善の循環であるが、世間ではよく見かけることである。例えば、今月号の主題報道の「エコ福祉用具プラットフォーム」に、社会的・人的資源を活用して、福祉用具を必要とする人たちの願いを叶える手伝いをしていることが書かれてある。慈済ボランティアは、長期的に慈善ケアを行っているが、福祉用具の使用期間が数日から数週間という短期間の場合もあれば、数年から終身使うという長期ケースもある上、福祉用具はその種類と価格が様々であり、家計の負担となるケースも少なくないことに気づいた。

そこで、ボランティアは工夫を凝らし、リサイクルステーションで回収した福祉用具を修理したり手入れしてから、それらを必要としている人たちに贈ることを思いついた。そして、無料で自宅まで送り届け、使用後は再び回収することまでしている。一つのチームで始まったこの取り組みは、十数年を経て台湾全土に広がり、現在すでに十三の拠点で展開されている。今年一月までに、延べ一万一千八百点を超える福祉用具が提供された。

高齢化社会における介護需要の下で、福祉用具はますます重要になっている。台湾は福祉用具の研究開発と製造に十分な能力を持っており、車椅子などの移動用具の輸出額が、二〇一四年には世界第二位にランクされた。政府

は多くの資源を投入してきたが、補助金はこれまでずっと地方自治体が給付してきたことから、都市部と農村部の経済格差により補助金の分配が不均等になることは避けられない。補助金は評価に合わせる必要があり、また使用に関する情報を提供することで、必要な人が適切な福祉用具を購入することができるようになる。

過去には、福祉用具と言えば、人々は疾病を連想することが多く、中古またはリサイクルされた福祉用具は殆ど受け入れられなかった。台湾でも、手入れや消毒、修理の費用がかかるため、賃貸サービスを提供している業者はごく僅かだった。従って、評価、情報、リサイクルの仕組みが整備されていなかった間は廃棄される福祉用具も多くあった。

近年来、大衆はリサイクルされて再利用する福祉用具を徐々に受け入れ始めている。しかも自治体の管轄下にある福祉用具センターが、積極的に中古福祉用具を提供するパイプ役を務めているが、未だ補助対象から外れた貧困者がおり、そのほとんどが民間の慈善組織の支援に頼っている。

同じく「高齢化社会」に突入したイスラエルの非営利組織ヤドサラが、一九七六年に始めた運営方式は参考に値する。福祉用具を無料で貸し出し、アドバイスサービスを提供すると共に、退院間近の患者の一時的なニーズに対して、「housepital」（家庭での病院のようなケア）も始めた。それは、入院する必要がないと判断された患者に福祉用具一式を提供し、自宅まで届けて静養をサポートするものである。それにより、院内感染のリスクを抑え、医療支出も節約できるのである。

イスラエルでは平均して二つに一つの家庭が恩恵を受けており、多くの人が感謝すると同時にボランティアとして投入している。「慈済エコ福祉用具プラットフォーム」を立ち上げた慈済ボランティアは、それらを必要としている人々の笑顔に迎えられ、持続して投入する使命感を見出している。新年が始まり、この豊かな善の循環が絶えないことを祈るばかりである。（慈済月刊六五二期より）

●八徳静思堂地下1階の桃園エコ福祉用具プラットフォームの倉庫には、様々な場所から回収され、整理を終えて一新された福祉用具が保管され、必要としている人々を助けると共に、物の寿命を延ばすのを待っていた。

主題報道

レンタルも販売もしないエコ福祉用具プラットフォーム

障害者を支える歳月

◎文・陳麗安　撮影・蕭耀華　挿絵・葉晋宏　訳・御山凛

「慈済エコ福祉用具」には、エアベッド、車椅子、歩行器、杖などがある…これらの物には、決まった持ち主がいるわけではなく、ただ「貴人」（困難な時に手を差し伸べてくれる人＝恩人）がいるだけだ。回収と修理を経て、様々な人生を巡り、障害者のリハビリと養生を支えた歳月がある。

静かな週末の午前、新北市汐止区にある静かな住宅街では、廃校になって久しい幼稚園が予想外の賑わいを見せていた。地面に描かれたポップスコッチのマス目をたどりながら中へ入ると、その明るい室内には、紺の上着と白いズボンを身に纏った十数人の慈済ボランティアが机を囲みながら、自分たちの体験を分かち合っていた。

「何人かのボランティアは、狭い階段に不満を言うこともなく、力を合わせて重い電動ベッドを階上に運んでいました。中風により長い間、不便な生活を強いられていた人を助けていたのです。とても感動しました！」とボランティアの曾美媛（ツン・メイユェン）さんが福祉用具の運搬作業について語ったが、その目にはまだ感動が残っていた。

曾さんが話してくれたその人は、三年ほど前に中風を患った患者で、住んでいる古いアパートは階段が狭く、以前にも他の団体に申請して、福祉用具を運んでもらおうとしたが、結局どのように運べば良いのか分からなくて、皆諦めてしまった。そんな時、「慈済エコ福祉用具プラットフォーム」に申請してみたところ、次の日に連絡をもらい、ボランティアが直接福祉用具を家まで届けてくれるということだった。

ここは慈済エコ福祉用具プラットフォームの倉庫の一つで、その日は慈済ボランティアの曾立文（ゾン・リーウェン）さんの要請で、病院・訪問ケア・リサイクル・地域担当というそれぞれのボランティアが、別々の経路で福祉用具プラットフォームと知り合い、関わった縁で一堂に集まっていた。

あるボランティアは、貧しい人が福祉用具を必要とする時、もう回収拠点を回って探す必要はなくなったと言った。また別のボランティアは、家で使わなく

●南投のリサイクルボランティア、洪錫財さんは手慣れた手つきで、車椅子のタイヤを交換した。側には、近所から持ってきたものやリサイクルステーションから回収された福祉用具が置かれてあった。

エコ福祉用具プラットフォームについて

なっても、まだ壊れていないので捨てるにはもったいない福祉用具を、慈済エコ福祉用具プラットフォームに送れば、ボランティアが手入れや修理をして、必要としている人を助けることができるので、「友人たちも喜んでいます。家の福祉用具に行き場が見つかったからです！」と語った。

提供している福祉用具

医療用ベッド、エアベッド、一般車椅子、特殊(高背)車椅子、便座椅子、コの字型四脚歩行器、多点杖、ステッキ、松葉杖、痰の吸引器、ネブライザー

福祉用具を申請（或は提供）する場合

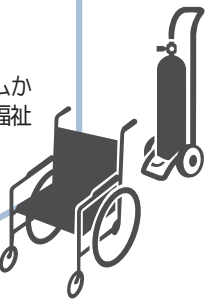
1.専用ダイヤル：03-8266779内線557呉師兄
02-22753926内線4389 林師兄

2.オンラインで「エコ福祉用具プラットフォーム」の申請書、提供書を記入。

福祉用具申請書

福祉用具提供書

万が一、福祉用具プラットフォームから在庫が無い場合は、居住地区の福祉用具センターに申請してください。



高齢化社会の訪れ　介護ヘルパー

福祉用具とは補助器具（Assistive Device）のことで、人々の日常生活や仕事、就学、通院でより自立でき、利便性に加えて、安全面でも役に立ち、介護者の負担を減らす道具である。国の福祉用具の分類基準は十一部門に分けられている。よく見かける補聴器や眼鏡などは、コミュニケーションと情報部門に属し、電動ベッドは住宅用家具類、車椅子や杖は個人の移動用具に属す。

高齢化社会は否応なく訪れる。二〇一九年の国民平均寿命は八十・九歳にまで伸び、歴代最高記録を更新した。それに伴い慢性疾患や機能障害も増え、それに中重度な心身障害者などを加えると、衛福部の統計によれば、二〇二一年、心身が不自由な人は約六十六万人を超えるとみられ、福祉用具の需要は年々高まっている。

人々の福祉用具への需要を満たすため、政府と民間が様々な方法を提供しているが、中でもよく見かけるのが「福祉用具のレンタル」だ。国際的には、例えばアメリカや日本の場合、「福祉用具のレンタル」を実施してすでに数年が経過

している。日本政府は、十項目以上の汎用及び特殊福祉用具のレンタルを提供し、一定の収入がある人は二十～三十％のレンタル料を払う必要があるが、一般市民はレンタル設備の十％の費用を負担するだけでよい。

台湾の場合、政府は心身障害者と長期介護が必要な人に福祉用具購入の補助金を出している。また民間団体と協力して、自治体は福祉用具センターを設立し、問い合わせやレンタル、無料貸し出しなどのサービスを行っているが、自治体によって異なる。

初めて中古の福祉用具を見たとき、一部の人は「誰かが使ったものだから、清潔だろうか？」という躊躇いや戸惑いが起きるかもしれない。だが経済的に負担できない人や早急に必要な人にとっては、新しいか古いか考えている余裕はない。

慈善サービスの延長
福祉用具プラットフォームの始まり

花東地区では、慈済ボランティアは弱者家庭や辺鄙な部落を長期間ケアしており、その過程で福祉用具の必要性が分かった。症状と病状の違いによって異なるが、二、三日から数週間或いは長期的、と使用期間は異なってくる。しかし、それらの値段は数千元（日本円約二万円）から数万元までであり、誰もが負担できるわけではない。その上、花東地区は広くて距離が遠いため、福祉用具センターに行くことも大変である。

リサイクルステーションには回収された福祉用具がたくさんあり、たまに、民間から寄付されることもある。ならば、それらの使える寿命を伸ばし、必要としている家庭に届けるのはどうか、とこの問題を解決しようとしたボランティアたちは考えを思いついた。

「始まりは北部から協力に来てくれたボランティアが、回収した福祉用具を北部から東部に運んでくれたことがきっかけでした」と、慈済基金会慈善志業発展処主任の呂芳川（リュー・フォンツァン）さんが説明してくれた。時間の経過と共に、福祉用具の需要はみるみる広がり、他の地区にも行き渡るようにするため、「各地から物を集め、それを保管する場所を見つける必要があるのではないか？」という考えが出てきた。

二〇一七年三月、「慈済エコ福祉用具プラットフォーム」が花蓮で立ち上げられ、倉庫が静思堂の地下に設置された。

「このプラットフォームを広めることは、慈済ボランティアが社会的弱者をケアすることと同じです。ボランティアたちも、福祉用具を必要としている人が増えていることに気がつき、積極的に加入

するようになりました。一人の善の思いが少しずつ結集して大きな力になっていくのです！」と呂さんはあの日の事を思い出して語ってくれた。東部エコ福祉用具プラットフォームが設立したばかりの時、花蓮慈済病院から大量の申請をしてきたのだ。理由は、多くの退院を控えた患者たちが、車椅子、電動ベッドや杖などを必要としていたからだ。

この他、慈済支部でも、民間の人から福祉用具の申請に関する問い合わせが多く入り、そのことを知ったボランティアが更に理解を深めると、申請者の多くは経済状況が良くないことが分かった。この時、エコ福祉用プラットフォームは慈善の機能を果たすことになったのだ。

回収された多くの福祉用具の状態は良く、ボランティアは「福を惜しむ」気持ちで再利用している。「エコ福祉用具のエコとは、物の使用寿命を延ばすことであり、大地を愛し守ることです」。呂さんはまた、エコ福祉用具が送り出される前に、ボランティアは必ず清潔度と安全性を確認しており、誰もがこのようなことを繰り返していくうちに、福祉用具の清掃と修理の達人になっている、と強調した。

他の福祉用具レンタルセンターとの最大の違いは、申請者がいくつ福祉用具を申請しようと、用具自体の値段に関係なく、「エコ福祉用具プラットフォームは一律無料！」であることだと呂さんが説明した。ボランティアが「見返りを求めない奉仕」という初心を持ち続けていることで、人の役に立つことだけを考えている。必要としている人がいると聞くと、直ちに連絡を取って、処理し、使用期間に関係なく、レンタル料は無料で、「運賃」さえも取らないのだ。この点が「この福祉用具プラットフォームの一番価値のあるところです」。

人的物的資源を揃え、台湾全土で奉仕する

エコ福祉用具プラットフォームが東部

●お金を出して購入した福祉用具は、必要がなくなった時は置きっぱなしになるかリサイクルするしかない。だが実際は、自分よりも必要としている人がおり、中でも、ベッドや車椅子は、リサイクル福祉用具プラットフォームでは一番よく申請されている項目だ。（撮影・沈秀娟）

で設立されると、北部の大安、基隆、汐止、永和、中和、北投の各区と桃園、新竹等の地域、そして中部の南投及び東部の台東と宜蘭の、合わせて十三カ所にエコ福祉用具プラットフォームの拠点が設立され、保存する場所もできて、手入れや修理を行うようになった。必要としている人は、オンラインで申請ができ、専用ダイヤルで内容の説明を聞くことも可能だ。各地の拠点でボランティアがチームを作って、現地のニーズや慈済花蓮本部の窓口が発行したオンライン申請で受け付けた内容を直ちに処理し、その後の回収も行っている。

「高齢化社会である今、新しく購入する人もいますが、使わなくなれば、多くがそのままになってしまいます」。呂さんは、四年前にエコ福祉用具プラットフォームが設立されたばかりの時、社会が高齢化に向かうにつれ、将来的には、中古の福祉用具の回収と流通が日に日に増えるだろうと考えた。

二〇二一年一月までのデータによると、エコ福祉用具プラットフォームから送り出された用具の数は、すでに一万一千八百点に上った。ボランティアはそれぞれの家庭を訪問し、申請者が他に必要としていることを知ったので、

現在は福祉用具プラットフォームへの申請書に、貧困者ケアや長期介護のケアの必要性を書く欄を増やした。これは一歩踏み込んだケアをするか、若しくは他の福祉や介護の施設へ紹介するためである。「将来的にはエコ福祉用具プラットフォームが地域に根付き、町長や村長が地域ボランティアと連携し、より多くの人の役に立つことを願っています！」と呂さんが語った。

（慈済月刊六五二期より）

●宜蘭静思堂前の空き地の軒下は、福祉用具の手入れと修理する場所であり、ボランティアが高圧洗浄機で車椅子を洗浄していた。

運送・設置・指導

慈善の精神でトータルケア

文・陳麗安　撮影・蕭耀華　訳・有田夏子

経済的に余裕がない家庭で誰かが病気に倒れると、自宅での介護が必要になり、患者の家族はさまざまな介護器具の準備に慌てふためくことになる。幸い中古品が見つかったとしても、それをどうやって家まで運んで設置し、使い方を習得すればよいのだろう？

病院の救急室で八年間にわたって警備員を務める彭振維（ポン・ツンウェイ）さんは、当直の際、救急室の外で患者の子供たちが言い争っているのをよく目にする。ある日とうとう耐えきれず、「親御さんが病気で臥せっているのに、なぜそんなに激しく喧嘩するのですか？」と尋ねた。すると彼らは、「お金のことですよ！」、「親が病気で倒れても、私たちは仕事を続けなければならないのです。一体誰が面倒を見ればよいのでしょう？」と答えた。

病気で倒れた家族を自宅で介護するために必要な福祉用具は、電動ベッド、車

●回収された福祉用具には4つの重要なステップがある。1回目の消毒と清掃、修理及び2回目の消毒。先ずアルコールで1回目の消毒をし、充分に日に当てる（上）。黄色くなって汚れていた便座をボランティアが繰り返し洗い、漂白剤で消毒すると、新品のようになった（下）。

椅子、トイレチェアなど大小様々あり、合わせて数万元（日本円約二十万円）に達することもある。病状によっては長期にわたって酸素ボンベや呼吸器が必要になる場合もあり、ホームヘルパーを雇用する場合は更に多額の出費が必要になる。

家族の介護はしばしば家計を圧迫し、介護者の心身の不調をも引き起こすことが多い。台北慈済病院・脳卒中センターの陳美慧（チェン・メイフェイ）看護師長は、脳卒中で寝たきりになる患者を例に説明してくれた。「近年、五十五歳から六十歳の患者さんの入院が増えてきました。この年齢層は現役で働いている人や一家の大黒柱である人が多いので、彼らが脳卒中で倒れると、家計への影響は少なくありません」。経済的に余裕のない家庭が介護に直面すると、「福祉用具を買うお金をどうしよう?」、「これからどうやって介護すればいいのだろう?」、「福祉用具はどうやって申請すればいいのだろう?」といった数々の問題に慌てふためくことになる。

身体障害者が福祉用具を購入する際には、政府の補助金を申請することができる。要介護認定を受けた資格者も同様に「福祉用具サービス及び住宅バリアフリー環境改善サービス」を申請することができる。病院で要介護認定を受けるか、または専門家の自宅訪問による認定を経て証明書を受領した後、先ずは自分で購入費用を立て替え、その後にレシートを添えて補助金を申請することができる。だがたとえ家計が苦しくても、不動産を保有しているために中低所得世帯の認定を受けられなかったり、手続きの各段階の規制によって、最終的に補助金が得られないことも少なくない。

「手続きのために二～三週間かかり、

●高齢の夫婦は、寝たきりの息子を介護する中で、多くの苦労や不便を経験してきた。ボランティアたちが補助器具を搬入し、使い方を教えていた。

それよりもっと時間がかかることもありますが、退院日が近く、福祉用具を今すぐ必要としている患者さんは、長い間待つことはできないのです」と陳看護師長が語った。

「一カ月の生活費を二、三千元でまかなっている家庭もあります。福祉用具を受け取るためには、車を借りて介護用品センターまで行くか、運送費を支払う必要がありますが、そのような経済的余裕がありません」。慈済ボランティアでもある彭さんは、エコ福祉用具プラットフォームに参加してはじめて、その理念の素晴らしさを知った。そこではボランティアたちが時間と能力の許す限り福祉用具を運搬している。彼らは皆、「苦しみから抜け出せない人がいるのなら、幸せな人がそこへ入っていくしかありません！」と口々に話す。

電動ベッドが自宅に届いた日

「陳おばさん、お元気ですか？」新北市汐止区の慈済ボランティアである何月澎（ホー・ユェポン）さんは、毎月陳おばさんを訪問しているが、この日は大きな「手土産」を持ってきた。

「見てください。こちらのおむつは信君が使うもので、小さい方はあなたが使うものですよ！」何さんは、朝早くからエコ福祉用具プラットフォームの倉庫に行き、寄付された成人用紙おむつやおむつシートを整理した。今はそれらを陳おばさんに一つ一つ説明していた。

「陳おばさんは倹約家で、使い捨ておむつシートも半分に切って使っています」と何さんは心を痛めながら言った。陳さん夫婦は出費を減らすため、介護用品を節約するだけでなく、一日三回の食事も友人が届けてくれる中華まんで済ませることが多い。

八十二歳になる陳さんは、国民年金を毎月三千元受け取っている。鉄道局を退職した八十六歳のご主人には、毎月二万五千元の退職金がある。本来、老夫婦が安心して老後を過ごすには十分な額だったが、五年前、まだ独身の長男である信君（仮名）に脳腫瘍が見つかった。信君は今では寝たきりになり、アルバイトどころか自力で生活することもままならない。在宅介護の費用、生活費、そして毎月三万元の住宅ローン。信君の貯蓄を使いきった後、老夫婦の退職金だけではその出費を賄いきれなくなった。同居している次男は資格試験の準備中であり、家計は日増しに苦しくなるばかりだ。

陳さん夫婦は不動産を所有しているため、低所得世帯への補助金を申請することはできない。かといって、福祉用具を買うための余分な貯蓄があるわけでもない。信君の身長は約百七十センチメートルあるが、小柄な陳さんにとって、自分よりも背の高い息子を介護するのはとても大変なことである。一日三回の食事の際は、信君の頭の下に枕をいくつか重ね、上体を支えてあげる必要がある。次男が家にいた頃には、入浴介助や体位の変更、おむつ替えなどを手伝ってもらうことができたが、今では年老いた夫婦二人が歯を食いしばりながらこの重たい介護の負担を引き受けている。

陳おばさんは、なんとか信君を清潔に保ってあげようと努力し、また家の掃除も欠かさなかった。しかし年齢を重ねるにつれて手足に力が入らなくなり、記憶が曖昧になることが多くなった。日々の介護による心身のストレスがどれほどのものであるのか、それは経験した者にしか分からない。

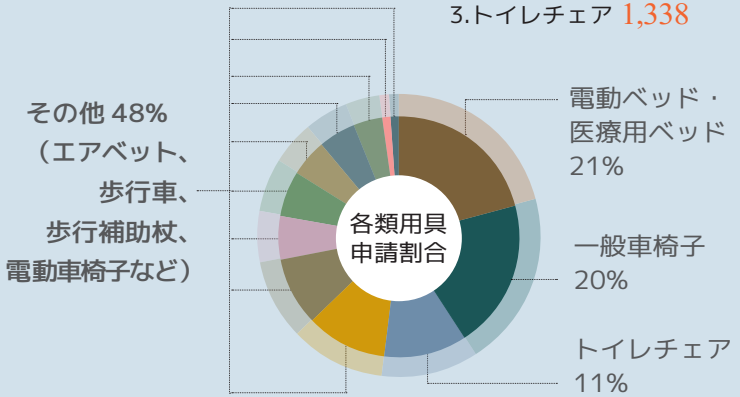
信君の病状は二〇二〇年頃から悪化しはじめた。以前はまだ簡単な言葉で反応できたが、今では何を聞いても返事をしない。そこで、陳おばさんの心労と生活苦を見かねた三十年来の友人が、慈済に連絡して支援のための評価を申請したのだ。

慈済ボランティアは、陳夫妻の自宅を訪問して緊急補助金を寄付したほか、エコ補助用具プラットフォームにて、信君のための車いす、トイレチェア、電動ベッドを申請した。また、信君の体の萎縮や不快感をやわらげるための簡単なマッサージを陳おばさんに教えた。

「こんなにたくさんの福祉用具を申請していただき、本当に感謝しています」。もう半年も前のことだが、陳おばさんは電動ベッドなどの福祉用具が家に届いたあの日のことを今でもよく覚えているそうだ。ボランティアたちはそれらを部屋

慈済エコ福祉用具プラットフォーム小計

- サービス対象世帯数：7,303
- 輸送した福祉用具の数：11,882
- 流通量トップ3：
  1. 電動ベッド・医療用ベッド 2,517
  2. 一般車椅子 2,395
  3. トイレチェア 1,338



（資料提供／慈済基金会 2021.1.13までの統計による）

まで運び入れ、その使い方を丁寧に教えてくれた。また背の高い信君を介護する際に自分が怪我をしないための介護技術も教えてくれた。車輪付きチェアトイレのおかげで、信君を浴室に連れて行くことも、より便利で安全になった。

以前は信君の食事に二時間以上かかり、夜の十時から十一時にようやく自分の夕食を取ることも珍しくなかった。信君は気分が悪いときには食事をとろうとしなかったが、陳おばさんには「ちゃんと食べなければ体力が持たないよ」と言って、息子をなだめることしかできなかったという。

「電動ベッドがあれば、枕を重ねて体を起こすという力仕事から解放されます」。言葉をしゃべることができない信君も、電動ベッドの上で嬉しそうにしていたと、陳おばさんは話してくれた。「電動ベッドが届いたあの晩、息子はいつもより夕飯を食べてくれたんです！」。

父をしっかり世話したい

訪問ケアと福祉用具を組み合わせれば、介護家庭が求めている思いやりとサポートを同時に提供することができる。被介護者の身体を助けると同時に、介護者の心を助けることができるのだ。

朝早く、基隆にある福祉用具プラットフォーム拠点のボランティアたちは、移動式トイレチェアと電動ベッドを車に載せ、訪問ケアボランティアたちと一緒に基隆の山の上にある陳さんという男性の家を訪ねた。ボランティアは二手に分かれ、一組は陳さんの父親の散髪と洗顔を、もう一組は部屋の掃除と電動ベッドの設置を担当することにした。

陳さんの父親は、半年前から病気で寝たき

●自宅介護に必要な福祉用具を買うことは、多くの家庭にとって重い負担になる。また無料の中古品を手に入れたとしても、それをどうやって運搬するのかという問題が立ちはだかる。

り状態となり、その介護の重い責任は、家計を支える陳さんの肩にのしかかっていた。重度の要介護状態にある父親の介護を一人で担っている陳さんは、看護の経験もなく、やる気だけでは体がもたなくなっていた。慈済ボランティアは、陳さんの依頼を受け、サポートとケアを開始することにした。

陳さんの父親の部屋は、長期の介護によりひどく散らかっていた。ボランティアは陳さんと一緒に掃除をし、故障していた電灯を修理した。それから父親の入浴を手伝い、電動ベッドを正しく設置し、その上に父親を注意深く寝かせた。ボランティアはベッドの上で体位を転換する方法を陳さんの前で実演しながら教えた。ボランティアの王許美麗（ワン・シューメイリー）さんは、入浴を終えた父親のためにお粥を作ってあげた。陳さんの父親は、お粥を食べたのは久しぶりだと嬉しそうに語った。

「父が病気になった時、家には私一人しかいませんでしたので、とても焦りました。不安のあまり、もう諦めようかと思ったこともあります。慈済のサポートを受けられて、本当によかったです。心から感謝しています」。陳さんは、介護のやり方を教えてくれる人がいたことで、生活に希望が持てるようになったと言う。「仕事から帰ると疲れ切っていますが、父親の面倒はしっかり見るつもりです。続けていけるという自信を持てたのは、ボランティアの人たちのおかげです。本当にありがとうございます」。

重い荷物を黙々と運ぶ

新北市の慈済ボランティアである謝国栄（シエ・グオロン）さんは、このプラットフォームが設立される以前から、補助器具のリサイクル回収と運搬に携わってきた。彼は長年の経験から、高齢の介護者が福祉用具の助けを借りずに介護しようとすると、ちょっとした不注意や姿勢の誤りで介護者もけがをしてしまうことに気が付いた。「介護者の皆さんからは、福祉用具のおかげで介護中に背中や腰の痛みを感じることが減ったという感想をよく耳にします」。

謝国栄さんによれば、高齢化と少子化の影響により、在宅介護の現場では「老老介護」が年々増加しており、年長者が若者を介護するケースも少なくないという。「申請者の家庭を見ると、四十～六十歳という中高年世代が七十～八十歳の高齢者を介護しているケースがとても多いのです」。

ボランティアたちは、福祉用具が急に必要となるケースにもよく遭遇する。ある時一人の母親から電話があり、特殊な車椅子を探しているという。幼い子供が

難病を患い、政府の補助金はすべて使いきってしまったので、他に助けを求めざるを得なくなったのだ。またある時には、人生の最後のひとときを自宅で過ごしたいと願う末期患者のため、急いで福祉用具を調達したこともあった。

用具を届けた三日後に使用者が亡くなり、ボランティアたちが再び回収しに赴くこともある。或いは家の玄関まで届けたときには、もうそれを使う必要がなくなっていることもある。だがボランティアたちは不平不満を口にすることもなく、申請者一人一人に心を込めて対応している。

物の使用寿命を延ばしたい、貧困家庭を助けたいとの思いで誕生した「慈済エコ福祉用具プラットフォーム」は、その後しだいに多種多様な家庭をサポートするようになった。コミュニティケアも、そのような支援ルートの一つだ。

かつては「慈済エコ福祉用具プラットフォーム」のことをよく知らないボランティアも多く、「参加すると多くの時間を割かれ、その他の訪問ケアや環境保護活動に支障が出るのではないか」と心配する人もいた。だが慈済エコ福祉用具プラットフォームの活動は、他の慈善活動や医療活動とも結びつくものであることが理解されると、この善行のプラットフォームに参加する人が一人また一人と増えていった。

慈済エコ福祉用具プラットフォームは、必要に迫られた人、経済的弱者、助けが得られない人、そしてリサイクル資源を活用して地球を守りたい人など、あらゆる人々に開かれている。提供可能な福祉用具がある限り、その依頼を断ることはない。介護の道のりは長いが、慈済のボランティアたちが真摯な態度を保ち続ける限り、善行の力と地球を守る情熱が止まることはない。（一部の資料提供・廖玉茹、葉晋宏）（慈済月刊六五二期より）

●ボランティアたちが力を合わせ、100キログラムを超える電動ベッドを縦横に動かしながら、古いアパートの狭い階段を一段ずつ登っていく。申請者の部屋がある4階に到着したときには、背中が汗でびっしょりだった。（撮影・頼慧娟）

●事故発生の翌日、台鉄が大型クレーン車を出動させた。脱線したタロコ号の車両を吊り上げ、軌道の上に戻してから機関車に連結して現場を離れた。（撮影・蕭耀華）

特別報道

4月2日台湾鉄道
タロコ408号列車事故

希望の光で真っ暗なトンネルを照らすよう祈る

◎文・葉子豪　撮影・蕭耀華　訳・済運

タロコ号の脱線事故現場で、昼夜を分かたぬ復旧作業の結果、運行が再開された。引き起こされた極限の痛みに傷つき、あたかもまだ真っ暗なトンネルの中にいるかのような気がして、光が見えない。未だ苦しみから抜け出せない人たちに、愛の温もりを与え続け、寄り添う。暁の光が希望をもたらす日が来るまで。

四月二日は清明節四連休の一日目に当たっていた、台湾鉄道（以下台鉄と称す）の北回り特急列車タロコ４０８号が、午前九時二十八分、和仁駅から崇徳駅の中間地点に差し掛かった時、崖から滑り落ちていた工事作業車に衝突した。百二十キロスピードの走行は急ブレーキをかける間もなく、三百トン余りの重い金属車体は瞬時に脱線し制御不能となり、数車輛が清水トンネル内の壁に衝突した。死者四十九人、負傷者二百十八人という台湾の鉄道史上で最悪の悲惨な事故となった。

花蓮、台東地方の住民達は家族や友人と共に墓参りするのを待っていた。しかし、訪れたのは永遠の別れという訃報だった。一方、事故の知らせを受けた北部に住んでいる家族は、鉄道は不通になっていると予想して車で花蓮に急いだが、渋滞が思いのほかひどく、焦る気持ちは強くなるばかりでも、ほとんど進むことができなかった。救急車や消防車、霊柩車が事故現場に向かって疾走するのを目にすると、とても耐えられなかった。

「事故の知らせがきてから、私は皆に制服を着て家で待機するようＳＮＳで指示しました」花蓮の慈済ボランティア范壘（ファン・レイ）さんは、十一時頃、ボランティアチームを二手に分けて行動を開始した。一つのチーム

事故発生後、慈済ボランティアは葬儀場に急行して奉仕拠点を立ち上げ、静思精舎の尼僧たちと共に、昼夜を問わず犠牲者の遺族に寄り添った。

は車で事故現場に向かい、事故状況の把握と脱出した乗客への寄り添いに努めた。もう一つのチームは急いで静思堂にある物資を点検し、トラックでテントと福慧ベッド、間仕切りなどを清水トンネル事故現場と崇徳駅、新城駅などのトリアージエリアに運び、奉仕拠点を設置した。

それと同時に、静思精舎の尼僧たちは第一線にいる救助隊員たちのための弁当を作り始めた。「十一時過ぎに指揮センターを立ち上げ、正午には先ず、五百個余りの弁当を届けました」と花蓮本部防災チームリーダーの呂学正（リュー・シュエジョン）さんが付け加えて報告した。

今までのように災害時のＳＯＰ（標準作業手順）に基づき、慈済チームは素早く行動を起こした。花蓮慈済病院では「レッド九号（重大事故発生による緊急処置）」を発し、千人に上る医療スタッフや事務関係者が直ちに投入された。慈済医療志業の林俊龍（リン・ジュンロン）執行長は、医療チームを率いて救急車で事故現場へ急行した。

台北慈済病院の陳美慧（チェン・メイフイ）看護師長はその列車に乗っていたが、座席は最後尾の一号車だったので、先頭の八、七、六号車のように致命的な衝撃を受けることはなかった。しかし、看護師という技能を持っていても、彼女にはなす術がなかった。「私たちの車両の乗客は全員無事でしたが、停電で扉が開かず車内に閉じ込められていたのです」。

その後、救助隊員の助けで外に出た後、彼女は直ちに救助チームに加わって乗客を誘導し、負傷者に寄り添った。その時、慈済の医療チームは主に負傷者のトリアージに取り組んでいた。「軽傷者はそのまま病院へ運び、重傷者は現場で応急処置をして、心肺機能を安定させていました」と。林執行長によると、慈済病院は既に重傷者が大人数になることを想定して受け入れ体制を整えていたが、実際に受け入れた患者はそれほど多くはなかった。「列車がトンネルの中で脱線して止まっていたので、狭い空間での救助が困難でした。軽傷者は自力で歩いて出てきましたが、腹部や胸部を負傷した人は動けず、現場で亡くなる人もいました」と林執行長が感慨深く話した。

清水トンネルと花蓮市内をひっきりなしに行き来していた救急車は、負傷者の他に遺体も運んだ。今回は死者と負傷者が余りにも多かったため、台鉄は移動専用列車を北側から清水事故現場に手配し、負傷者と遺体を運んで再び北側にある操車場に戻り、別の線路に切り替えて南に下っていた。崇徳駅と新城駅に到着してからは、負傷者を救急チームに任せ、遺体は遺体袋に納めた。その後、検察官の検視を経てから遺体を花蓮市立葬儀場

に運び、遺族が身元確認を行った。

「午後三時頃、捜索隊が、車輌の中には生存者はいないと伝えてきました」。トンネル内にはまだ多くの人が閉じ込められていたが、生存者がいないと聞くと、范壘さんは気持ちが沈んだ。自分たちは幸運にも無事で、子供が助け出されるのを気丈に待ち続けている夫婦にどう接したらいいか分からなかった。「彼らの期待を裏切ることができず、残酷に『もう帰ってきません』とは言えませんでした」。

最も困難な任務

自力で列車を降りて特別列車や救急車に乗ってきた人も体中に傷があり、手足も骨折していたが、医師の診断で生命に危険がないと確認された。負傷者と死者の状況を見ていると、生死間には曖昧な時間という領域はなかったことが分かった。犠牲者の多くは事故直後、既にその場で人生を終えていたからだ。私たちはどうやってその遺族を慰めるかが「困難な任務」となったのだ。

慈済ボランティアは昼夜分かたず交替で葬儀場にいる遺族に付き添った。呂鳳

事故発生の翌朝、慈済ボランティアが静思精舎の尼僧たちが作った菜食弁当を運んで、作業人員やメディア記者たちに朝食として配った。

瑛（リュー・フォンイン）さんは午後十一時から午前一時までの任務を引き受け、遺族を送り迎えするボランティアが戻って来るのを待っていた。「私たちは二台の車でホテルまで送り、それぞれの車に女性委員が一人付き添いました。翌日には亡くなった子供に着せる服を買いに行くのに付き添うことにしていました」と。

呂さんは慈済の奉仕窓口に用意している、家族や救助人員のためのパンやミネラルウォーターなどの数を記録していた。食欲がない時に体力を維持するバナナも用意したほか、事故現場や霊安室を行き来する家族のために、マスクも用意した。

「戻ってきましたよ！」四月三日の午前零時、犠牲者遺族の送迎を担当していたボランティアが葬儀場に戻ってきた。車を降りて来たのは、花蓮慈済病院の事務員である李思蓓（リー・スーペイ）さんと、同じ病院で勤務する夫の馮清榮（フォン・チンロン）さんだった。事故発生直後の緊急対応が始まってから当日の深夜まで、李さんは殆どの時間を負傷者の対応に努めていた。翌日には病院へ負傷者の見舞いに行かなければならなかったが、休息を取るのが惜しく、一分一秒たりとも時間を無駄にせずに、犠牲者の家族に付き添っていた。

夜になってからの身元確認作業は、犠牲者遺族が否応なしに、肉親がこの世を去った現実を突きつけられた。翌日の招魂の儀式は悲しみに溢れていた。遺族は四月三日の午後、六台のバスに分乗すると白い旗と位牌を携えて事故現場へ向かった。慈済ボランティアも組に分かれ、遺族一家族に一組が付き添った。

「帰って来なさい！」と犠牲者の魂に呼びかける一言一言が悲しみに包まれ、遺族たちは目を真っ赤に泣き腫らし、慈済人ももらい泣きしながら、遺族達の後ろに立って悲痛を強く支えていた。

「気を失った人がいます！…」一人の女性が悲しみの余り気を失い、立っていられなかったようだ。ボランティアの劉麗卿（リウ・リーチン）さんと張其富（チャン・チーフー）さん夫妻、そして、劉濟雨（リウ・チーユー）さんが女性を護送してその場を離れた。彼女を椅子に座らせたまま、三人のボランティアで持ち上げ、女性の体が倒れないようにしながら、砂埃だらけの斜面をよろめきながら移動した。その行動はとても大変だったが、真心からの思いやりに溢れていた。

親身になって感じる痛み

「私は六号車の中ほどにある座席ナンバーが三十番の座席に座っていて、乗車すると直ぐに寝てしまいました。その後、お手洗いに行ってから、座席に戻って『靜

思法髓妙蓮華』の小冊子を取り出して読んでいた時、車両が大きく揺れて、その途端に大勢の悲鳴が聞こえました…」。新北市に住んでいる林邱秀絨（リンキュウ・シウロン）さんは、今回の事故で怪我をした慈済人七人のうちの一人である。既に曽祖母になって八十三歳の彼女は語気に乱れもなく、静かに事故発生当時の様子を語った。

林さんは今回、静思精舎の厨房でボランティアをするつもりだったが、花蓮に着く前にこの事故に遭遇した。彼女が乗っていた六号車は大混乱に陥り、停電と同時に照明と空調が止まった。暗くて蒸し暑くなった車内のあちこちから数十人の乗客の泣き声が聞こえ、林さんも呼吸困難を覚えた。幸い勇敢な男性が怪我するリスクを冒して、力いっぱい二枚の窓ガラスを割って、切迫した状況は少し改善された。

間もなく救助隊が到着して器具を使って脱出経路を作り、半開したドアから乗客を誘導して脱出することができた。列車はトンネル内で重なり合っていたため、車内から地面までかなりの距離があり、救助隊員は大きなスーツケースを探して来て臨時の踏み台にした。林さんは注意深く救助隊員の手につかまって地面に降り、隊員の後ろについてトンネルの出口に向かった。

「初めは何とも感じていません

静思精舎の尼僧とボランティアたちは、事故現場の上方にある大清水休憩エリアに集まり、招魂の儀式に駆けつける遺族に付き添うため待機していた。

が、医師に診てもらうと、右側肋骨に激しい痛みを感じました」。その後、花蓮慈済病院でCTスキャンの検査を受けたところ、一本の肋骨にヒビが入っていることが分かり、漢方医と西洋医の治療を受け、一週間安静と診断された。

不幸中の幸いだった林さんは、總統府や新北市政府、台鉄、ライオンズクラブ、慈済などから贈られた見舞金を全部慈済に寄付し、さらに善行すると発願した。「この人生が続く限り、もっと真剣に善行します。既に八十歳を超え、力仕事はできませんが、厨房で野菜を洗ったり、切ったりするぐらいはまだ自信があります」と言う。

生死の境をさまよった経験談を淡々と話す様子には、人生の起伏に対して自分を戒める気持ちが表れていた。ボランティアは犠牲者の遺族に付き添い、悲しみを分かち合う中、あらゆるものを大切にし、善良な心をも大事にすることを学んだ。

「六台の観光バスが満員の遺族たちを乗せて、招魂の儀式ために事故現場に到着するのを見て、心が締め付けられ、彼らが声を絞り出して肉親の名前を呼んだ時、私の心は張り裂けんばかりに痛みました」と。ボランティアの鐘素真（ジョン・スージェン）さんは去年、両親を亡くしたばかりだったが、今回、また悲痛な雰囲気に包まれた。彼女は気持ちを切り替えて涙を呑み、心を痛めながらも悟りを得た。

「人は切羽詰まった時にしか、『本当に愛している』、『後悔している』と言えないのでしょうか？」。

「彼らが一口でも何か食べるのを見ると、とても安心します」と語ってくれた、四十年以上も慈善訪問ケアボランティアをして来た林慧美（リン・フイメイ）さんは、極度の悲しみで食べ物が喉を通らない犠牲者遺族に食事するよう励ましたが、人を助ける過程で自分も心に傷を負うとは思ってもいなかった。

「招魂の儀式から戻った後、『人生は苦しいもの』という思いが頭から離れられず、その夜は眠れませんでした。しかし、翌日、上人（證厳法師）の開示を聞いて、その苦労に思い至り、勇気を奮い立たせて葬儀場に向かいました」。睡眠不足で元気はなかったが、遺族の付き添いに行った。食欲もなかったが、無理に精舎の尼僧たちが作った弁当を食べ、人助けするために必要なエネルギーを補った。「それは本当に美味しい弁当でした。食後は元気が出ました。常住尼僧たちにお礼を言いたいです。とても感動しました」。

手を携えて心身の傷から抜け出す

犠牲者と負傷者が大量に出た大惨事では、第一線の救助専門隊員であれ、第二線で支援する民間のボランティアであれ、皆直接、死というものに直面すると、その悲痛で心に傷を負うかもしれない。如何に人助けの経験が豊富な慈済人であっても例外ではない。證厳法師との座談会で、事故で付き添いをしたボランティアたちは、現場の数々を報告するうちに感情が高ぶり、涙を流した。

精神衛生の災害支援における重要性を認識している故に、花蓮慈済病院は花蓮葬儀場に精神科医と漢方医の相談窓口と設置して、鍼灸、抜缶（漢方医治療の一つ）などの治療を行うことで、犠牲者遺族や慈済ボランティア及び作業員の心身ストレスを緩和した。

「災害の怪我はその場での衝撃以外に、長期的にわたることもあります。また、直接、衝撃を受けた人の他に、周りの家族や友人、または作業人員や救助隊員にまで同様なストレスを経験することもあ

慈済ボランティアは組に分かれ、事故現場に戻って招魂の儀式をする犠牲者遺族の一家族に一組が付き添って、彼らの最も辛い行程に同行した。

るのです」。花蓮葬儀場の拠点に駐在した精神科医の李卓（リー・ジュオ）医師は、全てのボランティアに対して、自分たちの体と心をケアし、休息を取ってこそ他人のケアができる、と注意を促した。

精神衛生面の他に、タロコ列車事故は慈済の災害予防及び救助に関する教育訓練方面の歩調を促進した。特に今回の事故で、ある慈済ボランティアは幸運にも無事だったが、心肺蘇生術や負傷者への応急処置などを学んでいなかったために、怪我人を手当てすることもできず、自責と遺憾の念にかられた。

災害予防チームのリーダーである呂学正（リュー・シュエジョン）さんは、「もし、彼が防災訓練を受けていたら、その方法と勇気をもって人を助けることができたでしょう。私たちの防災士訓練ではそういう基本的な応急処置を教えており、被害者家族をケアする時も、彼らの心が二次的に傷つくことがないようにすることができるのです」と話した。

人々を震撼させ、心に痛みをもたらす無常を、慈済は「如常（常の如くに）」と対処している。台湾全土の人にとって永遠に忘れられない今回の事故では、慈済四大志業体の医療スタッフや教師、学生、職員、ボランティア及び静思精舎の尼僧たちまでが、災害に対する臨機応変な愛のリレーに投入していた。事故から一カ月が経ち、緊急支援から後続支援に移り、緊急の医療体制と慰問も一段落したが、犠牲者遺族へのケアは続いている。慈済慈善志業の顔博文（イエン・ボーウエン）執行長が證厳法師と全ての慈済ボランティアを代表して、辛い思いをしている人たちに向かってこう約束した。「後続の心身ケアと怪我の治療にはまだ時間がかかりますが、慈済は寄り添い続けます」。（慈済月刊六五四期より）

社会福祉人員が緊急災害支援の第一線に

◎文・陳麗安　訳・済運

重大死傷事故では、日常生活の些細な行いが役に立つ。静かに寄り添うことが、時には声をかけることに勝り、最も良い慰めの方法となる。

これほどの大きな災害では、被害者とその家族はリアルタイムで数多くの現実問題に直面する。肉親の入院期間中の衣食住などの生活や犠牲者の肉親が遺骨

を持ち帰る手配などの事後処理の問題がある。慈済基金会の職員で、二十五年の経験を持つ社会福祉部門の陳珮甄（チェン・ペイジェン）さんは、こう振り返った。事故発生後、直ちに見舞金配付に関する業務に取り掛かった。続いて急いで花蓮慈済病院へ見舞いに行った。そして、次々に遺族が葬儀場に到着し、「その夜はボランティアが葬儀場で当直する必要があり、私も葬儀場に行って、そのまま翌日の午前四時まで当直を担当しました」。

陳さんはそうやって五日間支援していたが、その期間で最も心が痛んだのは、遺族が遺体の写真を一枚ずつ見せられて身元を確認していたことだった。事実を受け入れられない遺族や肉親が見つからない怒りをぶつけていた遺族、ＤＮＡ鑑定を待ち続ける遺族など様々だった。遺族は動転と悲しみで大きな打撃を受け、体調を崩して医者にかかる人もいた。

「政府の社会救済課のスタッフが慈済奉仕拠点にやって来て、ボランティアに診察に付き添ってもらえないかと尋ねました。私たちは交通手段の手配のほか、花蓮慈済病院の社会福祉室と連絡を取って、できる限り遺族がこれ以上の心配と悩みを抱えないように手伝っていました。例えば、医療費や健康保険証の携帯チェックなど細かいことです」。このような重大外傷事故では、社会福祉人員であってもボランティアであっても、こういう時は「静かに寄り添うことは声を掛けて慰めるよりも効果が大きく、適時に思いやりを与え、静かに側で付き添うのが最も良い慰めになる」と陳さんが言った。

陳さんの説明によると、慈済の社会福祉室スタッフとボランティアの葬儀場での役割は、主に状況を見て遺族の感情とニーズに応えてケアし、関連資源を探すことにある。この他、現場で他の機構のスタッフに飲料水やお茶を提供して支援することもある。例えば、遺体修復士の「７６行者」という団体スタッフは迅速に花蓮に来て仕事に投入していたが、天気が変わって服が足りなかった時に、ボランティアがマフラーを提供して寒さを凌いでもらった。

「現場ではできる限りの事をして手伝っています」と彼女が言った。

慈善と医療の結合

事故で二百人余りの負傷者が病院に送られたが、花蓮慈済病院は直ちに五十八人を受け入れた。負傷者の回復状況が短、中、長期と様々なため、自治体が現地の宿泊施設と協力して無料の滞在施設を紹介する一方、慈済も近い距離でケアできるように病院の宿舎を遺族に提供した。

慈済基金會の社会福祉スタッフである蔡惟欣（ツァイ・ウエイシン）さんによると、毎日、患者と接触しているが、人それぞれニーズが異なるそうだ。多くの負傷者は他県の人なので、家族が看病に駆けつけた。帰りの切符が取れない場合には、ボランティアが手配を手伝った。また荷物やケータイを失って不安になっている患者のためには、関連先に探してもらうよう連絡を取った。

「事故でメガネが損傷した人には、メガネ店を経営しているボランティアに協力してもらい、新しいメガネを作って、安心してもらったこともありました」。

また、慈済病院と基金会の社会福祉室スタッフが一緒に患者と家族の生活の世話、特に社会福祉室スタッフは家族に寄り添い続け、居住地域の慈済ボランティアと連携して、退院後のケアが必要かどうかも尋ねた。

「退院後にリハビリを続ける必要がある患者もいますので、経済面や生活面での問題が派生的に起きる可能性もあります。私たちは相手の意思を尊重しながら、最適な時期を見計らって尋ねています。もし必要があれば、その線で繋がりを持ち、病院で治療に専念してもらうと共に、家に帰ってからも安心してもらうようにしています」と彼女が言った。

退院を間近に控え、桃園に戻る予定だったある患者は、ボランティアが続けて見舞ってくれることを知ってとても喜んだ。患者の姪は、「叔父さんは、退院したら誰も構ってくれないのではないかと気落ちしていました。でも、今は家で療養することを楽しみにしていて、ボランティアの来訪を心待ちにしています」と蔡さんに話した。

「私たちの仕事は、日常生活の中の些細なことから支援し、交流しながら皆さんのニーズを汲み取ることです。将来、医療と慈善を結合させ、慈済のケア世帯として長期的に寄り添います」と彼女が言った。「皆で協力すれば、助けを必要とする人を一人たりとも見逃すことはありません」。（慈済月刊六五四期より）

0402
台鉄タロコ408号事故
慈済ケア日記

整理・顔婉婷　訳・田中亞依

事故概要

◎ 4月2日午前９時２８分、４０８号（樹林発台東行）列車が花蓮県清水トンネル北口で線路上に転落したクレーン付きトラックと衝突し、和仁駅と崇徳駅の中間地点で脱線事故が発生。１～３号車はトンネル外だったが、４～８号車はトンネル内壁に衝突し、トンネル内に立往生した。

◎ 乗客･乗員４９８人のうち４９人が死亡、218人が重軽傷を負い、花蓮や羅東などの病院に搬送された。

災害支援統計4/2～4/13

◎ **物資の配付**

弁当：3,112食

パン・マントウ：500個

飲料：58樽

即席粥：90箱

マフラー：749本

毛布：100枚

簡易折り畳みベッド：48床

間仕切り：37枚

見舞金贈呈：延べ90人

ボランティア動員数：延べ3,458人

活動地点：仁水、清水、崇徳、新城、花蓮市立葬儀場、静思精舎、花蓮慈済病院、台東などのエリア

写真提供・呂学正

4月2日

午前9時28分事故発生。9時31分乗客の女性から電話により花蓮県消防署に最初の通報。緊急事態のため発生地点を説明できず。9時35分消防署119緊急通報ダイヤルで事故発生地点を確認。9時50分交通局が国道台九線の仁水トンネル北上車線を救助のために封鎖。

10時33分、中央災害対策本部が正式に事故情報を発表。11時、花蓮慈済病院救急外来が花蓮県消防署からの通報で、多数傷病者緊急救護受入れ体制を立ち上げ。慈済医療志業の林俊龍CEOは救急外来スタッフと共に救急車で事故現場の支援に駆け付け、トリアージと応急処置を行った。

11時04分、慈済基金会は静思精舎に「0402台鉄タロコ408号事故」防災総指揮センターを設置。常住衆と清修士、職員及びボランティアを総動員して支援活動にあたった。

花蓮慈済病院は11時28分に「赤9号・多数傷病者受入れ体制」を発動。事故現場の救助難度は高かったが、事故直後に救出されて救急外来に搬送されてきた負傷者は軽度から中度の怪我が大半であった。その後、午後1時57分からの12分間のうちに、6台の救急車が花蓮慈済病院に到着し、心肺停止状態の1名を含む3名の重傷者が搬送された。増加する負傷者に対応するため、花蓮慈済病院は午後2時12分に2度目の「赤9号」体制を発動した。花蓮慈済病院は、前後して2回の多数傷病者受入れ体制を発動し、延べ約1000人で、軽傷者33名、中等傷者17名、重傷者8名を含む58名の治療に当たった。重傷者で心肺停止状態に陥っていた1名は救急救命処置が行われたが、亡くなった。

事故現場に駆けつけたボランティアは、11時28分から乗客や救助隊員らにパンや水の配付を開始した。午後2時に負傷者や犠牲者の遺体が崇徳駅に搬送され、トリアージが行われた時、ボランティアが協力した。

静思精舎の常住衆は12時15分に第1陣の弁当を届け、その後、数日にわたって食事提供の重要な役目を担った。

午後2時33分、事故現場の指揮で、遺体は電車で新城駅まで搬送され、そこからさらに葬儀場へ搬送された。ボランティアは新城駅に間仕切りで臨時安置所を設け、亡くなった人への助念を行った。

撮影・楊國濱

救助活動は夜を徹して行われた。ボランティアは弁当やスポーツ飲料などの物資を届けて、救助隊員や台鉄の修理作業員をサポートした。

午後5時、ボランティアたちは、花蓮市葬儀場で県職員から状況を聞いた後、8時に拠点を設置した。犠牲者の遺体が次々に葬儀場に搬入され、慈済ボランティアは県職員の要請で、被害者家族の付き添いと送迎を行った。ボランティアは2時間交代で夜通し、悲しみに暮れる被害者家族を慰めた。

4月3日

午前4時半から精舎の常住衆らがマントウやパン、豆乳、アーモンドミルクなどを作り始め、朝食の分が終わると、引き続き昼食と夕食の準備に取り掛かった。それらを葬儀場や仁水トンネル拠点に届け、被害者家族や県職員、台湾鉄路管理局（以下台鐵と略す）職員、葬儀業者、メディア関係者やボランティアに提供した。暑さ対策のため、冷たい飲み物や氷、冷やしタオルも追加で提供した。

慈済エコ補助器具プラットフォームも連携し、桃園、台北、宜蘭から車いすや歩行器、杖などの補助器具が集まった。11時に花蓮に届けられ、負傷者に提供された。

午後1時、ソーシャルワーカーとボランティアが葬儀場で被害者家族のケアを行い、見舞金を贈呈した。

午後2時、被害者家族は花蓮県が用意した6台の大型バスで事故現場へ向かい、「招魂」儀式を行った。精舎の尼僧や清修士、ボランティアがそれぞれ被害者家族に付き添った。その間、小雨がぱらついていたため、雨具や傘を提供した。

午後3時から5時、花蓮県民政局の手配の下、8名の精舎の尼僧が約100名のボランティアと共に、事故の犠牲者に対する助念を行った。

犠牲者の遺体が家族と共に居住地域に帰り、宜蘭や台東、台北のボランティアがケアを引き継ぎ、深夜になっても、葬儀場で被害者家族に付き添って遺体の到着を迎えた。台東のボランティアは2018年のプユマ号脱線事故でのケアを経験していたため、即座に拠点を設置して、交代でケアにあたった。

撮影・廖文聰

撮影・詹進德

4月4日

緊急救助活動が一段落すると、事故現場は台鉄による復旧工事が開始した。現場近くは交通の便が悪く、飲食店もないため、引き続き、現場で取材にあたるメディア関係者に弁当を提供した。

被害者家族が次々に葬儀場で遺体確認を行ったり、遺体の修復を待っていた間、精舎の尼僧や慈済ボランティアが彼らの心身のケアを行った。昼食や夕食の準備のほか、夕方は涼しくなるため、温かい飲み物や毛布、マフラーも用意した。

近い距離から花蓮慈済病院で治療を受ける家族の世話ができるように、と何組かの被害者家族が慈済の用意した宿泊施設に泊まり始めた。

4月5日

引き続き葬儀場で被害者家族に寄り添い、遺族や県職員、台鉄職員らに食事を提供した。花蓮慈済病院は葬儀場内に「安心奉仕拠点」を設置し、心療内科や漢方医の医師らが共同で被害者家族や救助隊員、警察消防隊、作業スタッフなどの心身のケアを行った。現場には間仕切りで心を癒せる静かな空間を作り、漢方医学による簡単な治療も行うことでストレスや痛みを緩和した。

数日にわたる救助活動の末、6号車の下敷きになっていた最後の犠牲者の遺体が午後3時15分に搬出されると、ボランティアは両脇に並んで助念を行った。

連日の救助活動で心身共に疲弊していた救助隊員や警察、台鉄工事関係者に慰労品を贈呈した。

撮影・葉宜家

4月6日

家族らが次々に居住地に戻っていき、葬儀場にいる人は減ったが、引き続き1日に100個ほどの弁当が必要だったため、慈済奉仕拠点は慈済病院の支援チームと共に、警察や検察官、台鉄職員に対して支援を行った。

ボランティア団体「76行者・遺体美容修復チーム」は100名以上の遺体修復師が台湾全土から駆け付け、一刻も早く遺体を家族の元に届けたいとの思いで、時間と競争して昼夜を分かたず、交代制で遺体の修復を行った。ボランティアは毛布やマフラー、簡易折り畳みベッド、飲料などを提供し、漢方医が疲労回復を促す治療を行った。

2組の遺族が現場に戻って招魂し、精舎の尼僧とボランティアが付き添った。

4月7日

葬儀場の慈済奉仕拠点と慈済病院支援チームは引き続き様々なニーズに応え、支援を行った。宜蘭、台北、桃園、台中、台南、台東など各地の慈済ボランティアも、地元に帰った遺族のケアを引き継いだ。

4月8日

花蓮葬儀場の慈済奉仕拠点撤収。

花蓮慈済病院は、「76行者」の修復師が遺体修復中に針や骨で怪我した人に破傷風の予防注射をしたり、傷の手当てをした他、全ての修復師に対して健康診断の採血を行い、半年間の健康状態を追跡する。

静思精舎では午後7時30分から『普門品』を唱え、死者の霊が安らかになり、生者の心が落ち着くことを祈った。世界33の国と地域の93の地域道場と個々人のオンラインによる延べ1万1千人が参加した。

4月9日

慈済の花蓮市立葬儀場での食事の提供は本日、昼食をもって終了し、台鉄と花蓮県政府社会局が引き継いだ。

慈済は台東葬儀場奉仕拠点を撤収。（慈済月刊六五四期より）

その車両に入ると

◎口述・呉坤佶（花連慈済病院整形外科主治医師）、
口述筆記・廖哲民　訳・黒川章子

各地から駆けつけた消防隊員や救助隊員が全力を尽くし、
変形した車両の中へ出入りを繰り返した。
彼らは天使のように、自分のことは顧みず、
ただ現場の負傷者と犠牲者の気持ちだけを考え、
その忘れることのできない空間から早く脱出させようとした。
それは最も心が痛む一歩であった。

四月二日午前、私は花連慈済病院整形外科で診察をしていた。九時過ぎに電話で、タロコ号脱線事故の第一報が入り、十時過ぎに受けた二度目の電話で、現場には多くの負傷者が閉じ込められているという報告を受けて、この事故がただ事ではないことがわかった。救助隊の仲間は皆そこにいるのだ。私は診察室を出ると、待合室にいた患者さんたちに謝罪した。「今日は本当に申し訳ありませんが、診察をこれで終わりにします。事故現場へ行かなければなりません」。

清水トンネルで任務を遂行する消防特別捜査隊と救助隊。救助隊隊長の呉坤佶医師（白衣）も負傷者の救助にあたった。（撮影・蔡哲文）

負傷者を励まし、救援に当たる

花連では各郷と鎮（台湾の行政区分）にそれぞれ緊急救助隊が置かれている。救助隊にはボランティアがいて、救急車に同行すると警察官と消防隊員に協力して患者を病院まで運ぶ。慈済病院の多くの医療スタッフはそのメンバーである。私はその花連県消防ボランティア大隊の救助隊隊長をしている。白衣を着替える

時間もなく、その上から消防隊の制服と装備を着け、その日は十一時に現場に着いた。消防署の仲間の先導で車両の屋根を乗り越えて地上に降り、続いて六号車を超え、七号車に辿り着いた。最も負傷者が多い場所だ。まず負傷者の救助を第一目標と定め、グループに分かれた。グループがそれぞれに、変形した車両の中からなんとか負傷者を救助すると線路脇に移動させ、搬送を待った。

車両という空間は通り抜けられて当たり前だと思っていたが、今回は通り抜けられなかった。その形が想像を絶するほど変形していたからだ。線路もバラバラになっていた。車両同士が押し合って曲がっていた。犠牲者は衝突の瞬間に亡くなっていたのだ。私は隊員に言葉をかけた。ここにいるのは善良な人たちばかりだから、勇気を奮い起こして連れて帰ろう。きっと感謝してくれるはずだ。

一人の女性が車体から投げ出され、その遺体が地上に横たわっていた。私は救助隊の制服を脱いでかけてやると、また救助活動を続けた。

一人の父親が二人の子供を連れていた。長女は頭部を負傷していたが、抱き抱えていた子の方が重傷だった。その子の頸動脈に触ると、まだ微弱だが動いていたので、搬送待ちの最優先に

し、その後ろを父親と長女にした。

その次には腰を怪我した女性を救助した。続いて私は七号車と八号車のドアの隙間に誰かが挟まれているのを発見した。這って近づくと彼を引っ張り、救助した。陳さんというその人は寒くてたまらないと訴えた。両足が切れて出血が酷かったが、その時私には防寒着も何もなく、白衣しかなかったので、それを着せて励ました。「頑張ってください。すぐに助けが来ますから！」

最後の一歩がこれほどにも痛い

トンネルの中で負傷者が次々に運ばれて行った。中でも事故のショックを受けた子供のことが忘れられない。取り乱して母親にすがりつき、医者を見てさらに怖がったので、私は母親に声をかけ、抱かせてくれるようお願いした。

「お母さんは怪我をしているけど、心配しなくていいよ。今日は注射をしないから。」一歳過ぎのその子は、初めは混乱していたが、やがて聞き分けて私に身を預けた。勇気がある子だった。私は母親に、応急処置を済ませたら子供も一緒に病院へ行くから心配しないで！と言った。子供が落ち着いたことで、その場にいた人たちも落ち着きを取り戻した。

トンネルの中は暗い。特別捜索隊や消防署チームは酸素ボンベを背負っていたが、それがない救助員もいる。血の匂いが密閉されて通気の悪い空間に立ち込めていた。私は咄嗟に衝動に駆られて外へ出て新鮮な空気を吸い、そして水を一口飲むと、また中へ戻ってやるべきことを続けた。

各地から駆けつけた消防隊員や救助隊員が全力を尽くし、変形した列車の車両への出入りを繰り返して救助にあたった。彼らは天使のように、自分のことは顧みず、ただ現場の負傷者と亡くなった人の気持ちだけを考えて、その忘れることのできない空間から早く脱出できるように救助を続けた。それは、最も心が痛む一歩でもあった。

悪夢から離れ 周りの人に関心を寄せる

最初に移送した重傷者と三名の遺体は、列車で当初移送の中継地にした崇徳駅に運んだが、列車とホームの高低差が大き過ぎて、搬送に不便だったため、指揮センターは改めて新城駅を中継地に定めた。

二回目に運んだのは大部分が遺体だった。私たちが新城駅に到着して検察官の検視に協力していると、慈済ボランティアが早速行動を起こしているのが見えた。ブルーの間仕切りで、通路と臨時の遺体安置区域を作り、家族が駆けつけて最後のお別れができるようにしていた。そして、私たちは夜まで一日中、最後の一人の「尊厳を伴う往生」まで力を尽くした。そのことが私の心を大きく打ち震わせた。

そして今、私は記憶にあるトンネルの中の出来事を全て消そうと努力している。今日手術を予定している患者さんのことに集中したいのだ。早くいつも通りの生活を取り戻したいと思っているし、他にも喜びや、考えてあげたい人たちのことがある。みんなそうだと思う。心に傷を抱えながら、落ち着いた暮らしをする方がいい。ただ陳さんと名乗った人のことを聞いた時は、ほっとしたものだ。手術を終えて容体も落ち着いたそうだ。彼が一番早く悪夢から抜け出せるのではないだろうか。すでに周りの人を気遣っているそうで、奥さんが疲れすぎていないか、自分にも何かできることはないかなど、模索し始めたとのことだ。

一人の医師として私がしたことは、実際わずかでしかない。この台湾にいる医師なら誰でもできることであり、おそらく私よりよくできたはずだ。

（慈済月刊六五四期より）

【負傷者家族の声】

ただ感謝しかありません！

◎文・雷宜達

東部幹線、それは故郷へ帰るいつもの道。四〇八号、それは故郷へ帰る時によく乗っていた列車。

そんないつもの道といつもの列車で「生と死の間を行き交う」旅をすることになるなど、誰が考えただろうか。

その日、妻は子供を連れて台東の実家へ帰るところだった。乗っていたのは八号車だ。連絡が取れない時間が二時間半続いた後、やっと妻から電話があった。「お父さん、私たちが乗っていた列車が脱線したの。子供は大丈夫だけど、私は足が座席の下敷きになっているの。側にいた人に子供を見てもらって、今救助を待っているところだから、後でまた連絡するね」。

その時、彼女は地面に横になっていて、すでに力が尽きそうで、眠けが襲って来たが、呉医師が来て手を握りしめ、子供のためにもしっかりするようにと励ました。

「生と死の間を行き交った時に、励まし、助けて、寄り添ってくれた方一人一人に感謝を申し上げたい。皆さんは私の恩人です。私たち家族がもう一度集まることができて、まるで生まれ変わったようです」。

大切な人が怪我を負っても亡くなっても、それは苦しみの始まりにすぎない。この痛みを一緒に乗り越えていけると信じたい。（慈済月刊六五四期より）

破損した車両の脇で救助隊員は困難を克服して生存者の捜索を続けた。作業が終わりに近づいた時、呉医師はショックを受けて母親にしがみついていた子供を慰め、移送されるまで怪我をした母親に付き添った。（撮影：左・呉坤佶、右・蔡哲文）

【證厳法師のお諭し】

人類共通の目覚め

◎訳・慈願　絵・林淑女

世の人は共通して目覚めるべきです。
疫病が出てきた原因を考え、
人として本来の善良な愛を呼び覚ましてこそ、
自らを救う事ができるのです。

私たちが共に生活している大空の下では、同じ時刻に異なる国々で、どれだけ多くの人々が災害に遭って苦しみ、どれだけ多くの菩薩が苦難の中に分け入って奉仕し、困難から解き放とうとしているか。ですから私たちは常に感謝の気持ちを持って、平安に感謝すると同時に、この世に幸せをもたらしている人たちにも感謝しなければなりません。

毎日安穏に精進して法を聴くことができるのは、とても幸せなことです。幸福の中に浸っている人は、この世の無常を忘れず、過ぎ去る分秒を大切にして、自分の人生を重く見て、他人を助ける人になることです。私たちは幸せなことに慈済大道を歩んでいます。それぞれの国には各々異なる暮らし方はあり

ますが、世界の慈済人は同じ理念の下に、発心立願して愛を奉仕しています。孤独と病苦にある人たちを慰撫して尚一層、愛の心を啓発しています。

今回の新型コロナウイルス感染症は商工業に影響を与え、困窮者はさらに生活に窮し、失業者は増え、各国の慈済ボランティアは困っている人たちに関心を寄せ、防疫物資を贈っています。インドネシアのボランティアは、すでに四十三万世帯に食糧を支援しており、今年の二月末までに、現地の実業家たちは慈済と共同で愛のエネルギーを結集し、百万世帯あまりを支援しました。

裕福な人は新春の祝い事を慈善活動に変え、生活に困窮する人への奉仕に変えたのは、なんと智慧のある行動でしょう。自ら実践して体得し、華々しい世界を出て薄汚い暗いところに向かい、天国の楽しさも地獄の苦しみも理解した上で、更に大きなエネルギーを発揮しているのです。その人たちは富者の中の富者であり、福と慧の双方を修めています。

アフリカの現地ボランティアは法を聞いて精進しています。彼らは中国語や台湾語が分らず、何回かの通訳を介する必要があるのですが、私の心を良く理解し、慈済人なら慈済の志業を行うこと、即ち慈悲済世をするのだと分かっているのです。彼らの生活は実に苦難に満ちていますが、心はとても豊かで、たとえ家には僅かな食糧しか残っていなくても、それらを全部人助けに使うことができるのです。克己して貧しい人を助け、自分の困難を乗り越えて自分よりも困難にある人を助けているのです。

貧しい人の人生を根本から変えるための手伝いは、必ずしも裕福な人にだけできるのではなく、誰でもできるのです。善行や奉仕を習慣づければ、自然に身を以て実践するようになります。皆が方向を同じくして同時に行動に移せば、如何に大変な奉仕であっても、楽しく感じられるものです。なぜならその善行に自分も力を出しているからです。善行は自分たちだけの力ではできず、私、あなた、彼の人の力があるから、達成できるのです。

人心を善に向かわせる啓発は、愛の教育によります。様々な方法を用いて善行へと導いていきます。長期にわたって経済的支援を続け、お年寄りに拠り所を与え、孤児たちを養育し、互いに世話し合えば、社会は自然と穏やかになり、繁栄し、発達していきます。人々が両手を差し伸べて福を造り、善の気風を形成すれば、「幸運」がもたらされ、尽きない愛と力によって、幸福も無量となるでしょう。

●

現代は科学技術が発達し、私たちの視野を広げていますが、世の中の至る所に危機が潜んでいることを知り、警戒しなければなりません。毎日のように地球の気候不順による災害を耳にしますが、原因を追求すれば、人為的な森林や熱帯雨林の伐採によるもので、動物の生息地域や生態に悪影響を与えており、山を掘って資源を採取したりすることに原因があります。また、森林を開墾して牧場にして家畜を飼育することも、全ては人の口の欲のためなのです。

人類の欲念が森林を呑み込み、地脈を破壊しています。土壌保持が困難なため、大雨が降ると山が崩れて川が氾濫し、大地に洪水をもたらします。山々が涙を流すと、この世に悲しいことが起こります。世界七十八億の人口に対してその十数倍の家畜を飼育して食料とするため、大量の水資源と飼料を消耗し、家畜の呼吸と排泄物によって大量の温室効果ガスが産出されています。家畜は成長するのに何カ月もかかりますが、屠殺して調理し、食卓にのせて享受するのは三十分余りに過ぎません。

「養家活口（家族を養う）」と言われますが、懸命に働くのは家族にひもじい思いをさせないためです。その実、五穀だけでも栄養は充分であり、それ以上、味覚や口の欲を追求する必要はありません。節度のない欲による殺生は、良知を惑わせます。菜食は一に生物を護り、二に食糧の節約にもなります。世界八億以上の人が飢餓に陥っている中で、もしも皆が食事を簡単にして「腹八分目、二分を人助けに」すれば、七十億の人が八億の人を助けるのに充分だと言えます。

大地が健康であってこそ、人類は平安でいられます。肉食の人が少なくなれば家畜の飼育数も少なくなり、地球の気候が正常に回復して人々の健康が保証されるのです。

天地の気候は急を告げ、災害はますます頻繁に発生し、被害もひどくなっています。「私が無事ならそれでいい」。自分には関係ないと思ってはなりません。今回のコロナウイルス感染症は、人類に警鐘を鳴らしており、教育なのです。世の人々が一緒に目覚め、如何なる因縁によって災難が引き起こされたかを思考し、人性の善良な愛を失われないようにするのが、自分を救う道なのです。皆さんの精進を願っております。

（慈済月刊六五三期より）

善行を習慣づける

◎文・釋徳仉／訳・済運

「知」と「識」に加えて「行」が必要で、
絶えずより強く善の意識を持ち、
善の道を行くことを習慣づけることが大切です。

無常を認識し、真理を追求する

一月四日、アメリカの慈済人と対話した時、上人は、コロナ禍で慈済の慈善活動が前代未聞の困難に直面しており、人と人の間の情も試練を受けている、と嘆きました。しかし、各国の慈済人が勇敢に責務を担い、「覚有情」の菩薩の大愛で以って、この世の苦難を取り除くために奔走し、奉仕してくれていることに感謝しました。

仏典には、濁世末法の時、この世に大小の三災が起きると書かれており、その小三災とは刀兵災、疫病災、飢饉災を意味しています。疫病が蔓延している間、食糧危機が発生し、小三災の一つである「飢饉」が起きます。また、資源不足による奪い合いで戦争が勃発します。上人によれば、三災が小三災であっても、人類に重大な生存リスクをもたらすため、誰もが警戒心を持ち、誠意で以って自らを戒めるべきです。

「人として生まれて来たからには、人生を全うしなければなりません。生きて行くには平穏を求めます。平穏を求めるなら、目覚めるべきであり、財や名利、地位に溺れてはいけません。人生は無常な故、道理を弁え、この世の真理を追求し、清らかな本性に立ち返って永劫の慧命を永らえるべきです」。

上人はこう言いました、「衆生は、生と死を分ける形で六道を輪廻しており、絶えず生、老、病、死の中を巡っています。次の生に持って行けるのは『業』だけです。衆生は皆、自分で長い間に造って来

た因縁の業を携えて六道を巡るのです。善業を造ったのであれば、霊は善に向かい、心田に善の種が深く植え付けられ、来世では善の道を歩み、引き続き善の種を蒔いて、福田を耕すのです。もし、茫然として悟りが開けず、道理が理解できなければ、心田には雑草が生え放題になり、たとえ心に元々悟りを開く善の種があっても、芽を出して成長するのは難しいでしょう」。

それで私はいつも、「知」と「識」に加えて「行」がなければならない、と教えているのです。道理を理解して、善の意識を持ち、体で実践して、絶えず善の意識をより強く持って内に修行するのです。それは丁度、儒家が説いた「明明徳」に言われているように、道徳の源ははっきりしており、それは即ち仏が教えている清らかな本性なのです。

「孔子は人の道理、即ち礼儀正しく、道徳を守るよう教えています。しかし、仏はそれを深く分析して、過去、現在、未来という三世には因果の概念が伴うことを教えてくれました。聖人の智慧は天文、地理、人間、心理に通じています」。上人は皆に、心して道理を体得すると共に実践するよう教えています。

無私の大愛・協力に距離はない

一月五日、宗教処の主任たちと国連特設チームのスタッフがインドでの配付活動に関して報告しました。二〇二〇年、十六の省で十四万世帯余りの延べ七十万人を支援しました。慈善協力のパートナーは、普明（プーミン）師兄（スーシオン）が紹介したＡＢＭ仏教団体とチベット仏教寺院及びカミロ修道会などです。

上人がこう開示しました、「インドでの慈善支援は私の心願の一つです。というのも、インドは仏教の発祥地であるため、慈済に縁ができて、仏の故郷を支援できることに期待を寄せているからです。普明と彼の母親は台湾に来て帰依しており、慈済人として本部は常

●慈済とチベット仏教の団体「八蚌智慧林」が協力して、1月にブッダが悟りを開いたブッダガヤで2000世帯に対して配付活動を行った。殆どの家庭は人生で、これほど大量の物資を受け取ったことがない。（写真の提供・慈済花蓮本部）

に連絡を取り合って彼らの行動を支持することで、彼らに帰属意識を持たせ、慈済人が持つべき志業に対する使命感を持ってもらっています」。

台湾とインドは距離的に遠いとは言えませんが、インドには慈済の拠点はなく、人や事、物の縁が成就していないために、遠く感じられるのです。上人は、その距離感を縮め、人・物・事が緊密になる縁ができることを期待しています。現地のことを現地の慈済人にやってもらえれば、より確かで完全なものになるのです。

宗教同士、距離を置かないようにするだけでなく、力を合わせて大衆を支援しなければなりません。慈済がインドで行った慈善活動のように、仏教団体と手を携えるだけでなく、カトリック教の団体とも緊密に協力し合い、互いの力を借りて行えば、最も支援を必要としている貧しい人たちを救うことができるのです。「皆が同じ使命を持ち、無私の大愛と力、物資を結集して共に事を成就させているため、お互いに感謝し合うべきです。大愛を広めれば、結集する大愛は途切れのないものになります。即ち、長く続く愛は過去から現在、未来へと間断のないものです」。

インドのカースト制度は無くすのが難しく、多くの貧困者は生活環境を改善することが難しいのです。智慧のある超然とした宗教団体や人道組織が、既成概念を打ち破って平等に大愛を施す必要があります。上人は、縁を大切にしながら、それぞれの団体とより緊密に協力し、一緒に苦難を救う力を発揮するよう促しています。

（慈済月刊六五二期より）

穏やかに人生を終える権利

長年にわたる医療ボランティアの経験からして、終末期では、患者と家族は理解すればするほど、積極的な治療を望まないようです。

◎文・周柔含（慈済大学宗教及び人文研究所副教授）　訳・李曉萍（明活）

近年、教室や施設で緩和ケア及び「患者の自主権利法」について紹介していますが、「死について語るのはタブー」という昔ながらの考えが薄くなったことを発見しました。授業後、約三分の二の若者が「人生の最後について」積極的に家族と話し合っています。しかし、中年の人は三分の一から二分の一の割合で、配偶者や子供と「人生の最期について」話し合うことを望んでいますが、彼らの両親と話し合うことを恐れます。

一方、医療側を見ると、ホスピス緩和ケア専門医以外では九十％以上の医師が、患者の病状と穏やかに人生を終える権利について、家族に説明することを望んでいないようです。

十一月の初めに、友人の九十八歳になるお祖母さんが誤嚥性肺炎で集中治療室（ＩＣＵ）に入院しました。ＩＣＵを出る直前にお祖母さんは寝返りした時、喉に痰を詰まらせて呼吸困難に陥ってしまいました。医師は、「お祖母さんの他の臓器は正常で、問題は呼吸だけです。少し頑張って、早期治療した方が希望はあります」と言いました。家族が挿管に同意した後、何度も寝返りを打って、私に電話をかけてきました。

友人に挿管後直面するかもしれない困難な選択について話すと、医師はなぜ、そんなことになるのかを教えてくれなかったのだろうと彼女はいぶかり

百の流れは海へと帰る

ました。そこで私は友人に、家族会議を開いて医師と慎重に話し合うよう勧めました。家族はお祖母さんの病状とリスクを認識してから医師に尋ねました。「これがあなたのお祖母さんだったら、挿管をしますか?」。「いいえ」、という医師の返答に、家族は自分たちの間違った選択にいっそう自責の念をかられました。

私はご家族の方に、お祖母さんの人工呼吸器を外せる可能性があるのなら、緩和ケア病棟に移した方がいいのでは、と提案しました。しかし、医療チームは、お祖母さんは末期患者であっても、癌でも「癌以外の八大疾患」でもないため、国民健康保険の緩和ケア医療の条件を満たしていないと言いました。

それは実に変な話で、腹が立ちました。規定に合致していないというだけで、人生の終末の権利を剝奪されるのです。私は心の中で、これは生命を尊重する「公平と正義」という原則に則っているのか?と叫びました。また、医師として奉じる生命倫理の「善行」と「傷つけない」という原則はどこに行ってしまったのか?

二週間後、お祖母さんの苦痛を和らげるために家族は管を抜く決定をしました。管を抜いた翌日、医療チームは相変わらず、お祖母さんは緩和ケア医療の条件を満たしていないと主張しました。お婆さんは三日目に亡くなりましたが、家族は愛する人の息苦しそうな様子や、癲癇を起こした時の鎮静剤やモルヒネを注射する場面を目撃する度に、憐れな思いで心が痛みました。

長年の医療ボランティアの経験から、終末期では、患者と家族は理解すればするほど、要求する治療が少なくなることが分かりました。しかし、患者とその家族が病状を良く理解していなくて、医学的知識もない場合、どのようにすれば正しい選択ができるのでしょう?

医療価値の創造は「患者の視点」から始まり、さらに重要なのは、患者が穏やかに人生を終える権利を大切にすることではないかと思わずにはいられませんでした。(慈済月刊六三八期より)

国際慈善

反復して無常を呈するコロナ禍

今まで通り善行する慈済

文・顔婉婷（慈済基金会文史処職員）
訳・本諦

新型コロナウイルス感染症は世界秩序を乱し、人々の生活パターンを変えた。しかし、この一年間、コロナ禍は未だに終息が見えないだけでなく、オーストラリアとアメリカで森林火災が延々と燃え続け、中国ではこの雨季に豪雨による大災害が起き、台風が何度もフィリピンやベトナムなど東南アジア諸国を襲った。多くの人が苦難を強いられ、揺れ動く不安な世界で、慈済は今まで通り善行を続けている。

二〇二〇年は世界の人類にとって最も苦しく、不自由な一年であり、至る所でパニックや憂い、恐怖が満ちていた。目に見えない新型コロナウイルス（COVID-19）が、世界で疫病という戦争にも似た戦いを引き起したかのようだ。

一年という長い戦いの中で人類は負け続け、感染症の終息はまだ見えず、変異ウイルスが忍び寄るようになり、より多くの不確実性をもたらしている。

二〇一九年末、中国湖北省武漢市で未知の肺炎が報告され、十二月三十一日、武漢市衛生健康委員会は初めて疫病を公に報告したが、その時点では市内で二十七症例が発見されていた。一年後の二〇二〇年十二月三十一日、新型コロナウイルスは既に、世界の二百以上の国と地域で八千三百万人余りに感染し、今年一月十一日には九千万人を突破した。

疫病は今までの世界秩序を乱し、人々の元来の生活パターンを覆した。マスクの着用、こまめな手洗い、人同士の距離の確保などは、人々の新しい生活の基本条件となった。遠隔授業、在宅勤務、ビデオ医療は徐々に生活の新しい日常となってきている。

慈済は慈善事業に始まり、半世紀を経て、二〇二〇年でも今まで通り善行を続けている。

この一年、止まることを知らない新型コロナウイルス感染症だけでなく、世界各地で災害が頻発した。オーストラリアとアメリカの森林火災、中東とアジアに広がった東アフリカのイナゴ被害、中国

の豪雨による重大被害、フィリピン、ベトナムなど東南アジア諸国を襲った数々の台風、レバノンの首都ベイルートで起きた大爆発事故等々。世界中に動揺と不安が広がり、人々が苦難に陥った。

慈済は「慈悲済世」の主旨の下に、今まで通り志業を行っている。コロナ禍に対応して世界五大陸で支援活動を開始し、二〇二〇年には十九の国と地域が新たに加わり、今では百十九の国と地域でケアを行っている。

台湾では、常時行われていた慈善活動において、ボランティアの安全を第一にと考えた結果、訪問ケアも一時は電話訪問に切り変え、人との接触では予防措置をとった。新学期が始まる前に「希望が見える、安心して就学」プロジェクトを展開し、コロナ禍の影響を受けた家庭の子どもたちに対する就学補助を強化した。機関へのケアや施療などのボランティア奉仕活動は、政府の感染予防規定に従い、解除されるまで延期された。リサイクルボランティアは通常通り分別作業を行っているが、各拠点では感染予防措置を徹底している。

国際災害支援活動では、コロナ禍の影響により、国際間の渡航禁止や都市封鎖で進度が遅れていても、ケアは中断されていない。サイクロン・イダイの被害を受けたモザンビークでは長期支援の一つである学校建設、シエラレオネ共和国とハイチでは貧困救済プロジェクトを続行している。レバノン、ベイルートでは、爆発後初めて配付活動が行なわれた。

慈済のボランティアが在住している国と地域では、災害や人災が発生した時、今まで通りケアを続けている。オーストラリアの森林火災が広がった時、ボランティアが消防車を買う募金集めを行ない、被災世帯にプリペイドカードを配付して見舞った。アメリカでは州を跨いで森林火災が猛威を振るい、ボランティアは感染予防措置を取りながら、何度も配付活動を行い、緊急見舞い金をタイムリーに届けた。台風二十号と二十一号がフィリピンに大きな被害をもたらした時も、ボランティアは感染症を恐れることなく、被災者雇用プロジェクトで街の清掃をして復旧させ、被災者に見舞金と物資を配付した。また、同様に台風被害に遭ったベトナムや干ばつと洪水に見舞われたカンボジアでも、地元のボランティアが同様に感染予防をしながら活動を行い、被災した住民に今しばらくの間の困難を乗り切ってもらえるよう、期待を込めて支援した。

毎年年末になると、多くの国でこの一年の社会の移り変わりを象徴する代表的な言葉を選ぶ投票をしている。二〇二〇年を代表する台湾の文字は「疫」、米国は「パンデミック」、英国は「ロックダウン」、日本は「密」だった。おそらく、密閉された空間と密集、密接な接触を避けるよう呼びかけたことから出た言葉であるが、人々の心が密接に結びつく希望を表わしている、という意見もある。いずれにしても、新型コロナウイルス感染症は既に世界を覆っており、慈済ボランティアはより寛大で深い思いやりと智慧でもって、苦難に喘ぐ人々に寄り添う必要がある。

これに対して證厳法師は、十二月二十一日の慈善志業週間報告会で、「無私の大我」という理念でもって大衆を諭した。「天下の出来事が全て自分と関係があるのは、天下の一人であるからです。誰もが自分という小さな『我』に執着せず、一緒に『無私の大我』となるべきです。衆生を済度するには、世代から世代へ繋がなければなりません。一つの国を救っても、まだ別の国があり、この時代が終わっても、また別の時代がやって来ます。見返りを求めず、仲良く、大我と大愛の精神を持てば、時間と空間、人と人の間には、隔てるものなど何もありません」。

（慈済月刊六五一期より）

2020年歳末 貧困救済の配付活動

訳・高雪白

ハイチのボランティア・如済（ルージー）神父と張永忠(チャン・ヨンジョン)さんは台湾から届けられた白米をOPEPB総合学校の学生と近辺の貧困世帯に配付した。住民は、慈済の支援は適時の雨のようなもので、食事が途切れずに済んだことに感謝した。（撮影・凱辛雅 2020.12.8）

➡慈済とインド･カミロ修道会は４月から11月まで、インドの６つの省で8万8千世帯に食糧を配付した。カミロ修道会の聖職者や医療スタッフが自主的に、政府から援助を受けられない下層階級の人たちを護っている。（写真の提供・慈済花蓮本部）

↘疫病と干ばつ及び漁の禁止で、パラグアイ･ヴェロッタ州イペカイト地区の川漁師たちが生活に支障をきたしていた。首都アスンシオンの慈済ボランティアは、様々な食糧や物資を持って、船で配付に行く準備をした。（撮影・楊忍變2020.12.8）

⬇アメリカでは感謝祭前後にコロナウイルスの感染者が激増した。北カリフォルニアの慈済ボランティアは、マウンテン･ビューのキャンピングカーが並ぶエリアへ向かい、低所得者やIDを持たない弱い立場の人たちのため、外出禁止令が公布される前に急いで物資を届けた。（撮影・廖瓊玉 2020.12.5）

冬を越す大阪の「街友（まちとも）」たちを支援する

自粛規制は守っても、愛が遅れてはならない

文・陳静慧　撮影・孫素秋（大阪慈済ボランティア）
訳・李暁萍（明海）

以前、大阪西成区には「日雇い労働者」の仲介業者が多かったが、バブル経済後は、不況により「街友」たちが集まる場所になっている。昨年実施された感染防止対策の影響で急増した失業者は、路上で三食と一泊を求めていたが、多くの慈善団体が炊き出し活動を中止した。そして、コロナ禍に加えて寒い冬が再来した。

二〇二一年の初め、日本は新型コロナウイルス感染症の拡大が予想を越えて深刻となり、一日の感染者数がピークを迎えた。「日本医師会」は声を上げ、大阪府がすでに医療崩壊の危機に瀕していると訴えた。一月九日、日本政府は二度目の「緊急事態宣言」を発令したが、一月中旬に感染者数が激増し、二月初めには三十九万人の感染者を記録した。

ＮＨＫの報道から、厚生労働省の統計によると、新型コロナ感染拡大の影響を受けて解雇や雇用終止を告げられた労働者など被災者の数は、昨年末時点で八万人近くに達し、コロナ禍が発生してから第一波の失業者となったと報じた。ここ数十年で、日本の非正規や派遣社員の数は大幅に増えている中、この新らたな失業者が加わった。大勢のコロナ難民が街角をさまよわずに済むにはどうすればいいのか。市政府の緊急課題の一つとなっている。

大阪の「街友」と「日雇い労働者」が集中する西成区は、一九六〇年代には日本経済が高度成長するにつれて斡旋業者が大きく増えたが、一九九〇年代にはバブル経済後の不況に見舞われた。ここでの臨時雇用は、長期間路上生活者になることを避ける最後のチャンスを失業者に提供してきたといえる。

西成区のあいりん臨時夜間緊急避難所（あいりんシェルター）は、大阪市政府が委託しているもので、「街友」と「日雇い労働者」に無料の短期宿泊施設を提供している。コロナ禍で防疫対策を徹底するために、収容人数を五百人から三百人まで減らした。また、毎日列を作って入所する方式から決まったベッド方式に変え、間仕切りカーテンを設置すると共に、入口で検温と消毒を徹底的に行うことにした。

三密を回避し、隔離しても愛は隔てない

日本は去年、冬になってから感染者数が連日記録を更新した。十二月三日、大阪府は緊急対策本部会議を開き、「大阪モデル」に赤信号を点し、府民に「自粛」を要請して、不要不急の外出を控えるよう呼びかけた。各駅には、マスクを着用し、警戒心を持って、近距離での接触を避け、感染拡大を防ぐよう公告を貼った。

慈済ボランティアは毎日、政府が発表する感染者数に注目する一方、シェルターの責任者山中秀俊さんと連絡を保ち、十二月六日の配付活動について討論してきた。日本のNPO法人釜ヶ崎支援機構の紹介により、関西地区の慈済ボランティアとあいりんシェルターが協力して行う冬の配付活動は、今年で五年目を迎える。

ボランティアたちが会議で討論したのは、コロナ禍が再び深刻になり、次の寒波も近づいている中、配付活動を一～二週間延期するかどうかであった。しかし、十二月中旬まで伸ばしたところで感染拡大は落ち着くのだろうか？今は防寒着が最も必要とされる時期である。不確実なことが多い中で、ボランティアたちは予定通り配付活動を行うことにした。愛は遅れてはいけないのだ！

二百五十人分の冬物肌着とズボン、靴下及びタオルを合計十二箱シェルターに届けた。山中さんは、「労働者たちは今日の活動を心待ちにしていました。『自粛』という緊急事態下でも配付活動を延期しなかった慈済にとても感謝しています」と言った。

ボランティアの中村省吾さんは、初めて配付活動に参加した二人の若いボラン

●大阪のあいりん地区労働福祉センターは釜崎支援機構が運営する夜間の緊急避難所である。職員と共に、慈済ボランティアは去年の6月、「街友」たちにカレーライスを配付した。

ティアに、九十度のお辞儀と両手で物資を差し出す基本動作を示して見せた。ワーキングホリデーで日本に来た江佾澄（ジァン・イーツン）さんは、両親も慈済のリサイクルボランティアで、来日後、直ちに日本支部と連絡をとり、活動に参加する意向を示した。「人を助けることは自分を幸福にすることだと思いました」。今日の活動で彼は、誰もが他人に必要とされることができると感じた。

もう一人日本で仕事している卓樟汶（ツォ・ツォンウェン）さんは、どうして慈済の配付活動がこんなにも正式なものなのか、ずっと理解できなかった。今回、

コロナ禍に関して

大阪モデル

大阪府が独自に自粛要請をするかどうかの基準。「モニタリング指標は緑色、黄色と赤色と三段階に分れている。去年、重症者病床の使用率が６３％に達し、医療崩壊を阻止するために、１２月３日に“非常事態”を示す「赤信号」を初めてランドマークの通天閣に点灯し、人々に不要不急の外出を自粛するよう呼びかけた。

慈済の配付と対策

- 会場レイアウトを簡素化し、紺色のテーブルクロスは使わず、事前にテーブルを消毒する。横断幕を掲げる代わりに、慈済の旗を使用すれば、消毒と洗濯が容易になる。
- ボランティアの参加人数と滞在時間を減らし、帰宅前に現場で使ったマスクを交換する。

自分の目で見て、この九十度のお辞儀の力が相手に温もりを与えることを感じた。

屋外の広場に長テーブルを置き、ボランティアは五人だけだったが、二人の若者の参加により、仕事も楽になった感じがする。センターの職員たちは屋内の人数制限と安全距離を取ってもらう作業をした。余瓊珠（ユージョンツゥー）さんは安心した笑顔を浮かべ、「日雇い労働者が一人一人、距離を保てば、密になることはありません」と言った。

山中さんは、慈済が今まで日雇い労働者たちを支援してくれていることに感謝した。そこで彼は自主的に募金箱を作り、誰もが人助けする力を発揮して欲しいと願った。「私たちが恩返しできるのは、ほんの僅かです。それでも、役に立ちたいと思っています」。

長年にわたる交流で、日雇い労働者たちは物資を受け取ると、財布からコインを取り出し募金箱に入れてくれる。七十七歳の秋庭益夫さんは、小銭を貯金箱に入れながら「社会の平和」を祈った。コロナ禍の規制で、七十歳以上の人は入所できないため、彼は六カ月間も外で暮らさなければならなかった。「日雇いや掃除夫の仕事をしても、食べていけません。歳を取り過ぎているから、仕事も

見つかりません。本当にあなた方には感謝しています！」

防疫しながら、暗がりを出入りする

コロナ禍で、就職の機会は更に少なくなった。大阪府は去年四月七日に、初めて「非常事態宣言」を発した。以前から定期的に炊き出しをしていた多くの団体（慈済も含む）が活動を中断したことで、日雇い労働者や路上生活者に与えた影響は小さくない。慈済の炊き出し窓口である余さんは心配して、山中さんに連絡を取り続けた。三月から五月にかけて、世界中でマスク不足に陥った時、慈済は何とかして、あいりんシェルターにマスクとアルコール、消毒液、おにぎり等の物資を届けた。

六月一日、ボランティアは規制解除を知ると、直ちに山中さんに連絡し、月一回の炊き出しを再開した。一食であっても、ボランティアたちが伝えたいのは愛の温もりである。

しかし、感染はまだ終息しておらず、油断はできなかった。引き続き三密（密閉・密集・密接）を避けなければならない。前夜、真鍋慶子さんと余さんは二百二十人分の食材を家に運び、切った

り洗ったりする準備作業を終え、翌日、あいりんシェルターへ持って行って調理した。午後一時半ごろ、シェルターの近くに住んでいるボランティア・陳美月（チェン・メイユェ）さんが自転車で現地に集合し、合計六人で配付活動を行った。

山中さんは、ボランティアの数が減るだろうと考え、自主的に調理の手伝いを十人の職員に頼んだ。しかし、密になるのを避けるために、お弁当に切り替えることを提案した。あいりんシェルターは

●酷寒の12月、ボランティたちは日雇い労働者たちのために、あいりんシェルターに防寒着を届けた。冬の配付活動は5年目を迎えた。

この数カ月間、とても忙しい。山中さんは、「労働者たちのために一回しか炊き出しをしていませんが、ボランティアたちがリスクを恐れず来てくれることにとても感謝しています」と言った。

コロナ禍が収まらない中、七月の配付活動はおにぎりに変更し、端午の節句の頃にはボランティアは特別に二百個の菜食チマキを用意した。防疫のために、単に温かい一食を提供しようと思っても、簡単に済ませることはできず、おにぎりを提供し続けるしかないのだ。

コロナ禍の影響で増えた「街友」たちに対して、山中さんは多くの団体と共同で、大阪地域で彼らに宿泊と仕事の機会を提供している。「彼らは真っ先に社会から忘れられてしまう人たちです。人の命には貴賤はありません。もっと彼らへの支援活動を頑張らなければならないと思っています」と山中さんは言う。

シェルターでの配付を終えると、ボランティアたちは必ず周辺を回り、「街友」たちにも支援物資を配付して、大都市の片隅で野宿する彼らに温もりと祝福を届けている。世界的に大流行しているコロナ禍はまだ出口が見えないが、愛は止まってはならないのだ。

（慈済月刊六五二期より）

四月の出来事

訳・済運

04・02	台鉄タロコ408号が午前9時28分、花蓮県秀林郷清水トンネルの入り口で事故を起こし、大勢の死傷者が出た。花蓮慈済病院は通報を受け、直ちに救急外来に大量負傷者緊急対応体制を発動し、医療及び事務人員ら延べ千人近くが支援体制に加わった。また、11時4分に静思精舎に「0402台鉄タロコ号事故」防災調整総指揮センターが立ち上げられ、ボランティアを動員してケアと物資の補給などの後方支援を開始した。一方、負傷者と犠牲者遺族への付き添いも、移動先のボランティアが引き継ぐ方式で続けられた。（詳細はページ34～73）
04・04	エクアドルの慈済ボランティアはチンボラソ県チュンチ郡で、2月半ばの豪雨による大規模土砂災害の被災者43世帯に、緊急見舞金とエコ毛布などの物資を配付した。

04・08	◎慈済アメリカ総支部はカリフォルニア州第２０選挙区のコニー・レイバ州議員が催したオンライン会議で、「２０選挙区の２０の傑出者賞」(Terrific 20 of SD 20) を受賞した。慈済がコロナ禍で防疫物資の寄贈と食糧の配付による社会貢献を続けていることに対して表彰したもの。 ◎インドネシア・東ヌサトゥンガラ州で、熱帯サイクロン・セロヤの影響で４日、山崩れや洪水等の災害が発生し、百人に上る死傷者が出た。慈済インドネシア支部の職員とボランティアが８日、空路で当州の首都クパンに向かい、被害状況の調査や物資の配付等を行なった。慈済スラバヤ事務所が災害支援物資を用意し、軍艦で被災地に運んだ。
04・10	◎慈済基金会と聚落書坊文教発展協会は共同で、花蓮静思堂に「健康物語コーナー」を立ち上げ、本日運用が始まった。毎週土曜日に親子読書活動を行い、子供の心身の育成と家庭間の交流を促すものである。また、行政院東部聯合サービスセンターと共に「もしも児童劇団」を招いて、静思堂で児童劇「不思議な温泉水～誰か手伝ってくれない？」を上演し、物語を通して人助けの大切さと環境保全の観念を訴える。 ◎嘉義大林慈済病院は慈済マレーシア支部とオンラインで、継続して協力する覚書を取り交わした。２０１６年１１月に取り交わした初回の環境に優しい病院、緊急医療、終末期緩和、地域医療などの内容を継続すると共に、今回、介護ケアと認知症健康管理及びケアと医療ボランティアの養成などを付け加えた。
04・11	台湾駐トルコ事務所の鄭泰祥元代表と駐台北トルコ貿易事務所のベルディベク代表の両夫妻が、慈済ボランティアの胡光中、周如意夫

	婦と余自成さんの付き添いの下に、静思精舎に證厳法師を訪ね、慈済のシリア難民に対する全方位のケアを含むトルコでの善行に感謝した。
04・13	スリランカ・コロンボの慈済ボランティアは慈善基金を集めるために、毎月定期的に菜食のバザールを催している。13日と14日は「シンハラタミルの新年」にあたり、特別に伝統的なお祝いの食べ物を作って美味しい菜食を披露した。
04・18	慈済基金会は世界地球デーに呼応して、3年続けて台北市政府と共同で環境保全を呼びかけた。本日は大安森林公園で「地球にやさしい菜食の家族デー」活動を行なった。今回、行政院環境保護署は「農地から食卓まで」と題して参加する他、「台北市ホタル観賞の季節」活動と結合することで、生態保育、CO2の削減、プラスチックの削減などグリーンライフの理念を訴えた。
04・22	慈済基金会はジンバブエ慈済ボランティアが行う各種慈善活動を支援するため、本日、6千枚のエコ毛布と1万本のエコマフラー、1万2百個の携帯食器などの災害支援物資、千パックの生理用エコナプキン及び井戸の修繕に使うステンレス鋼管、スパナー、パイプレンチ、耐水パッキングなどの材料や道具を船便で輸送した。そのうちの井戸に関する品目は、慈済ボランティアの魏良旭さんと魏杏娟さん及び兆遠鋼鉄株式会社が共同で寄付したもの。6月初旬に現地に到着する予定。

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段２４８号
TEL:886-5-5372000

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301

台北支部（新店静思堂）
231 新北市新店區建國路 279 号
TEL:886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路 2 号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989999
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ニューヨーク支部
（New York）
TEL:1-718-8880866

カナダ
TEL:1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL:1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル　Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス London
TEL:44-20-88699864

フランス Paris
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
TEL:43-1-7346988

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL:95-1-541494

マレーシア
Penang
TEL:604-2281013
Malaka
TEL:606-2810818

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

スリランカ　Hambantota
TEL:94(0)472256422

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈済

２０２１年５月１９日発行・２９３号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 2 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9994
E-mail: 021620@daaitv.com

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）

新年の願い　菜食で地球を救う

　慈済科技大学に通うフィリピン国籍の学生たちは旧正月の休みの間、静思精舎に戻って新年を過ごした。「菜食で地球を救う宣伝アンバサダー」を担当し、元気一杯に、新年のお参りに来た人たちに、菜食のメリットを説明し、プラスチック製品を減らすことで地球を救おう、と呼び掛けた。
（文・黄愛恵　撮影・張清和　2021 年 2 月 12 日　花蓮にて）

慈済日本サイト　慈済ものがたり